特255
428

【信の日本叢書第三篇】

二宮尊德先生の教訓

信の日本社編

始

特255
428

上都賀郡眞名子尋高小學校に建てられし
少年時代の尊德先生銅像
（出井俊一寄贈）

はしがき

二宮尊德先生の名を知らぬ者は今日の日本國民の中には恐らく一人もゐないでせう。尋常小學校の修身教科書の中にも出てゐるし、唱歌にも歌はれてゐます。まだ小學校へ入學しない幼ない兒達でも、兄さんや姉さんの話や歌を聞いて、先生の名を知つてゐます。

併し先生の生涯を知れば知るほど、その教に接すれば、接するほど、いよ〳〵益々先生の人格の氣高さに胸うたれ、その教には永遠の眞理が宿り、その行は萬人の活きた龜鑑であることを思はされて參ります。

殊に今日の如く、農村が疲弊して困るとか、世の中が不景氣で弱るとかなどの聲が矢釜しく、社會全體に何處となくイラ〳〵した氣分が漲つてゐて、個人の生活の上に於ても、社會國家の前途にも少なからざる不安さを感じさせられてゐる折柄、一家窮乏のドン底から振ひ立たれて、よく二宮家を復興せられたのみか、小田原藩を始め諸藩、幕府の請に依つて、道德衰へ田畑荒れはてた窮乏

五・六・九・紀・本・聯

疲弊の村々を更生せしめられた尊德先生の事蹟は、大きな教訓を現代日本に投げかけてゐるやうに思はれます。

今日は一體に農村疲弊とか、一家一身の困窮とかを、たゞ社會のせいにし、國家の政治の善惡にしてしまふといふ考が盛んであつて、本當に自分自身に立ち歸つて、ドン底から振ひ立つて更生を圖らうとする氣魄が薄らいでゐるのではないでせうか。

勿論、農村の疲弊も、われ〳〵個人の日常生活の不安定も、その原因は複雜であつて、社會的原因や國家的原因に基いてゐると思はれるものも多々あるでせうが、風聲鶴唳的ないろ〳〵な言葉に驚怖を感じて、本當に勤むべきところに充分でない嫌もないではないやうです。

昔から至誠天に通ずるといふ言葉がありますが、本當に誠心を以て、勤め勵むならば、必ずや天地を動かす事も不可能ではない。尊德先生の生涯は、實にこの事を身を以て教へられたのでした。

この意味に於て二宮先生の精神が、もつと現代の日本に生きて來なければならないと思ひます。

この書は、前後の二篇よりなり、前篇に於ては二宮先生の生涯の大要を、小學校上級生、中等學校生徒、男女青年團員の諸君に讀んでいただける程度で、わかり易く、總括的に紹介し、後篇に於ては、先生の門人福住正兄翁が、親しく先生の側近に隨つて、晝夜その教を聞きしものを、後年記錄せられた「二宮翁夜話」の中、比較的青少年諸君にわかり易いと思はるゝものを抄錄いたしました。

もしこの小冊子が、幾らかでも、二宮先生の精神が、現代に生きて來るための機緣ともなれば、實に喜ばしい次第であります。

二宮尊德先生の教訓

目次

前篇

一、生ひ立ち……（一）
二、更生の一路……（七）
三、少年時代の逸事……（一二）
四、出世の端緒……（一六）
五、畢世の大事業……（二〇）
六、東奔西走……（二六）
七、不滅の燈……（三一）

後篇

尊德先生語錄……（三五——七五）

前篇

一、生ひ立ち

尊徳先生は天明七年秋七月二十三日、相模國足柄郡櫻井村栢山の貧家に生れられ、その少年時代から早くも世の中の辛酸を味ひ盡されつゝも、人間はたゞ食べて死ぬだけではいかぬ、何か世のためにつくし、國に報いる所がなくてはならぬとこゝろざされて、七十餘年の生涯を世のため人のために費して道徳と經濟との調和を圖られた方であります。

先生は幼名を金次郎と云つて、栢山の百姓で貧乏ではあつたが非常に情け深い二宮利右衛門と云ふ人と、その妻の至つて心掛のよいお由さんといふ人との間に生れられましれた。

この二宮家は金次郎のお祖父さんの代までは相當に暮してゐたのでありましたが、天明年間の重なる洪水で、酒匂川に沿ふた二宮家の田畝は殆ど押し流され、それに、年々の不作が引續いて貸した金は還らずミジメな不運に陥つたとき、金次郎の父は病みついて一家悲慘窮乏のドン底におち込んで仕舞ひました。この時金次郎は一少年の身でありながら、母を助けて田畑に働き、或は薪を拾

ひ、寒暑風雨に拘らず一生懸命に働いて疲れた體に足をひきずりながら家に還つては、病み衰へた父の看病に力を盡したのであります。

金次郎の父の病氣が次第に重くなつて、一時はとても生き長らへることが出來ぬと思はれたほどでしたが、この孝子の誠が天に通じたものか、その後次第に癒くなつて、間もなく全快したのでした。一家の喜びは實は譬へやうもありませんでした。

父は自分を癒して呉れた醫者の親切に非常に感じて、一日も早く藥禮をしようと思つて、僅かばかり殘つてゐた田地を賣つて金二兩を携へて醫者のところへ參りました。すると、この醫者は極めて情深い人でしたから、利右衛門が苦しい思ひをして田地を賣つて義理を立てる心掛に感じて、

『それは大變なことをされたものだ。わたしは今貰はなくても困らないのだから、金を返へして田地を返して貰ひなさい。』

と云つて金を手にしようともしませんでしたが、利右衛門が、たつてと云ふので、その中から一兩だけを取つたといふことであります。

かゝる父親の律義なもの堅い心掛が、金次郎の品性の上に、尠からぬ影響を與へてゐるのであります。

父の病中、金次郎が父に代つて、村のために盡した美談があります。この頃、酒匂川の洪水を防ぐために村民が、戸毎に、總がかりで土手普請をすることになりました。金次郎の家からも誰か一人は出て行かなければならなかつたが、父の利右衛門は病みついてゐるので、やつと十二歳になつたばかりの金次郎が、健げにも父に代つて毎日その普請工事の手傳に出て、多くの大人達にまじつて、かひ〳〵しく働いてゐました。

心の清かな金次郎は、『自分はまだ子供である。他の村人たちと同樣に充分に働くことは出來ないと思つて、他の人々が休んでゐる間も、休まずにまめまめしく働きました。この優しい清らかな心構には誰一人として感じないものがありませんでした。

ですから、金次郎が大人並には到底働くことが出來なかつたが、誰もとやかく云ふ者がありませんでしたが、正直な金次郎は、『それでは皆さんに濟まない。何か皆さんの同情にお報ゐしたい』と思つて、家に歸ると、何足もの草鞋を作つて、翌朝になると、それを普請場に持つて行つて、『私は幾ら稼いでも皆さんに比べて一人前の仕事が出來ませんから、その足しにこの草鞋を穿いて

下さい。』

と申しました。村の人達は非常に感心して、

『そのやうな心配はしなくてもよい。』

と斷つても、金次郎は普請中一日もこの草鞋を作ることを缺かさなかつたといふことであります。

父の利右衛門は、元來酒が好きでしたが、長い病と饑饉とのために貧苦が激しかつたので、好きな酒も飲むことが出來ませんでした。孝心に篤い金次郎は、『どうにもして、お父さんの心を慰めて上げたい』と、毎夜草鞋を作つて、それを市に賣りに出ては酒や滋養物を買つて來て父にすゝめました。父親は大層喜んで、

『お前が毎晩骨身をくだいて、わたしに酒を呑まして呉れるのは勿體ない。お前のやうな孝行な子をもちながら、貧乏に苦しまされてゐるのは、皆、わたしが惡いからだ。どうか勘忍してお呉れ。今に家運の榮えることもあらうから。』

と云はれるほどでした。

父の病氣は、一家の手厚い看護と醫者の親切によつて一時快くなつたものゝ、それは永くは續き

ませんでした。元來、虛弱であつた利右衛門は、なんとか家運を挽回しようとした爲め、心や身體に無理をしたので、寛政十二年、金次郎の十四歲になつたとき、再び大病になつて、一家の寢食を忘れての看護も、その甲斐なく、あはれ、妻子四人を殘して、九月二十六日遂に此世を去つて仕舞ひました。孝心深い金次郎は云ふに及ばず一家の悲嘆はたとへやうがありませんでした。

杖とも柱ともたのむべき父を亡くした二宮家では、母親の繊い腕では、とても三人の子供を養ひ育てることが覺束ないので、親戚の評議の結果、末子の富次郎といふ乳呑兒は、隣村の親類に預けることになつた。

『お前と三郎右衛門とは、どうとも養ふことが出來るが、富次郎まではとても手に及ばないから伯父さんのもとへ預けることにした。これからはお母さんも一生懸命に働くから、お前たちも、わたしを助けて二宮家を興して、死んだお父さんの靈を慰めてお呉れ。』

と云ひ聞かせて、母子兄弟力を合せて家業に勵むことになりました。

一家の生計の都合で止むなく手足纏ひの末子を親類に預けたものゝ、流石恩愛の情に引かされて母は夜な〳〵涙をしぼられて、夜も寢つかれなかつた。金次郎は、

『お母さん、あなたは毎晩泣いてゐなさるが、どうなさつたのですか。』
と訊ねますと、
『いゝえ、何も格別のことはないよ。たゞ富次郎を預けてゐるから、乳がはつて痛んで寝られない。そのうちには癒るだらうから、心配しないで寝てお呉れ。』
と優しく答へました。金次郎は早くも母の心を察して、
『お母さん富次郎がゐたとて、別に大して生計の不自由もありますまいし、殊に私が一層働いて、その足しをいたしますから早く呼び戻しませう。』
と、一旦親類に預けた富次郎を迎へることに致しました。
富次郎を迎へ戻した二宮家は、貧しき中にも愛の風が吹き渡つて、親子四人、嬉しく且つ楽しく暮らしてゐました。殊に金次郎は朝は星を戴いて山に入り薪を集め、夜は更くるまで縄を綯つたり草鞋を作つて、困苦のなかにも、さゞ〳〵を楽んで勵んでゐました。
ところが、悪いときにはまた悪いことが續くもので、金次郎がやつと十六歳になつた年、不幸な母親も、不圖した病がもとゝなつて、金次郎兄弟の手をつくした看病もその効なく、夫利右衛門の

跡を追つて死出の路に旅立つて行きました。
こゝに於て金次郎は全く途方に暮れて仕舞ひました。親類縁者が集つて漸く野邊の送りを濟ましで、金次郎は伯父の萬兵衛方へ、二人の弟は母方の親戚川窪家に預けられることになりました。いはゆる一家離散といふ、まだ年齒も行かない子供としては、この上もない憐れな境遇に立たされることになつたのです。この時、弟の三郎右衛門は九歳、富次郎はやつと二歳の乳呑兒でした。これらの愛兒を殘してこの世を去つた母親の心、二人の幼弟を抱いてかうした逆境に立たされることになつた金次郎の心、たゞ思ひ遣るだに涙の種であります。
かうして人生最大の逆境に立たされたけれども、金次郎は終に屈しなかつた。この境遇の中から一路二宮家の復興に向つて精進し始めたのであります。

二、更生の一路

伯父の萬兵衛の家に養はるゝことになつた金次郎は、一生懸命になつて、伯父の家業を手傳つて

そのひま〳〵に讀書に耽みました。

金次郎はまだ父が居られる頃から、『人は學問を修めて人としての道を行はねばならぬ。さもなければ禽や獸と同じことで恥しい次第である』と思つて、仕事の暇々には、家にあると、山に行くとにかゝはらず、昔の偉人の書物を讀んで、その教に親しんでゐました。無智な村民たちには、金次郎の心持がわからないで、『書物狂だ』と謂つたり、『キ印金』と綽名したりしたほどでした。

伯父の萬兵衛も、ごくもの堅い百姓氣質の人でしたから、學問の大切な譯を知る筈もなく、金次郎が晝は充分に農事に働き、夜は夜で遲くまで夜業に勵んで、伯父やその家族が眠る項から書物を取出して讀むといふやうに、細かな注意を拂ひながら勉強しようとするにも拘はず、

『金次郎、百姓には學問なんか要らないぞ。お前のやうに他人の世話になりながら、道樂の學問に高い油を使はれては溜まるものか。』

などと叱り付けるほどでした。

けれども、心の素直な金次郎は、いさゝかも伯父を恐みに思ふことなく、『なるほど、伯父さんの厄介になつてをりながら、餘分に油をつかふことは濟まないことである。これからは自分の力で油

を得て勉強するやうにしやう。さうたしら伯父さんもお叱りにはならないだらう』と、酒匂川の沿岸で誰も人の顧みもしない荒地を見出して、そこに菜種を蒔いてその生ひ立ちを待つてゐました。雪ふる寒い日にも、水氷る寒い夜にも、その手入れに骨を折りました。その甲斐あつてか、やがて收穫の時が來ると、五六升の菜種を手に入れることが出來ました。大層喜んだ金次郎は、その菜種を小田原の油屋へもつて行つて、油に代へて貰つては家に歸りました。

それからは、この油を使つて眞夜中に勉強することにしました。金次郎のこの行屆いた心掛は極めて美しいものでしたが、一向に學問の有りがたみを知らない伯父の萬兵衛は、

『たとひ自分の油でも、百姓になんか學問なんか要るものでない。夜中など遲くまで本を讀んでゐれば晝間の働きの障になる。』

などと、呶鳴ることを常としました。けれども金次郎は些しも怨むこともなく、晝間は前に倍して働くやうに努め、夜も遲くまで繩を綯つたり草鞋を作つたりして、一家が全く寢靜まつた頃に、光の漏れないやうに行燈に着物を冠せて、一番鷄の鳴く頃まで毎夜讀書したのであります。

金次郎の心から寸時も離れなかつたのは、『どうしたら落ぶれた二宮家を早く興すことが出來る

か』と云ふことでした。悲しい時や愁に沈む時など、父母の墓にまうでゝは、恰も生ける人にものの云ふ如く、

『お父さん、お母さん、金次郎は如何なる艱難苦労にも耐え忍んで、必ず二宮家を興します。どうか今暫くお待ち下さい。』

と、涙ながらに物語つてゐたといふことであります。

だが、少しばかり殘つてゐた田畑は、洪水のため砂礫に埋もれてしまつた。外に財産といふものは何もない。この二宮家をどうして復興させることが出來るか。金次郎は賢い少年であつた。意志の非常に強い少年であつた。伯父の手傳で始終忙しい間にも常に一家復興の道を考へてゐました。

一つかみの種を蒔いても七八升の菜種が穫れた――といふ經驗から、小を積んで大となす――いはゆる、塵もつもれば山となるといふ道理を知つた。『潰れた家を興すには、これだ！ チリ／＼と一歩づゝ進まなければならない』と思つて、人の遊んでゐる休日や祭日の暇を利用して、誰もかまはない荒地を拓いて田をこしらへ、人が捨てた苗を拾ひ集めて植ゑつけたりすることにしました。そして少しでも暇があると見廻つたり世話したりしました。ところが、秋になるとその丹誠の功があ

らはれて、捨てられた土地や苗から美事な米が一俵あまりも穫れました。

この一俵を、金次郎は貧しい人々に無利子で貸して、その保管を頼みました。利子なしで物を借りることの出來るのは、貧しい人に取つては、どれほど有りがたいことでせう。誰も喜んで借りました。そして何時でも入用の時には、新しい米で返へすことを誓ひました。

その後なほ金次郎は荒地の回復につとめましたから、だん／＼と米の收穫がふへて、最初の年に一俵あまりであつたものが、次の年には五俵となり、保管してある米と合せて三四年後には二十俵にもなりました。かくして苦しみのドン底から浮び上つた金次郎の前途には、だん／＼輝かしい更生の曙光が見えて來ました。

二十歳になつたとき、金次郎は伯父の萬兵衛に多年の世話になつた恩を謝して、久しぶりにわが家へ戻つて參りました。何分永年捨てゝあつた家は、見る影もなく破れ果てゝ、雨漏りはする、壁は落てる、まるで化物屋敷同様でありました。金次郎はこの破れた家を丹念につくろひ、そこに住んで、なほも一生懸命に働いたので、お金もたまり、生計向きも大分樂になつて行きました。たまつたお金で、失くした田畑を次第に買ひ戻して、二十三歳の頃にはすつかり、二宮家の復興が出來

ました。

二十八歳の時に預けてあつた弟の三郎右衞門を呼びかへし、その後親類の養子といたしました。末弟は、幼いときから大そう悧口でありましたが、九歳のとき痘瘡を病んで死んで仕舞つたのです。

金次郎が僅か數年間に潰れた一家を立て直したことには、村の人たちは皆な驚いて、ほめたゝえました。その評判は次第にそれからそれへと傳つて行きました。

これ偏に金次郎の立派な心掛けと、勤めて止まぬ努力の賜物であります。

三、少年時代の逸事

金次郎が、後世、人のため世のために盡した事蹟は數限りもなく澤山にありますが、その心は既に少年時代から芽生へてゐました。貧乏の家に生れて、こと毎に不自由な思ひをしながら、他人に思ひ遣り深く、しかも何か世のために盡さうといふ金次郎の心は、次の話にもよく現はれてゐます。

父親がまだ存命であつた時、家の生活のために隣村に子守奉公に出てゐました。まだ遊びざかりの年で、他人の中に出て幾多の辛苦を嘗め、憂き月日をつとめて、主人の家から一枚の袷と二百文の錢とを貰ひ受けてわが家へ歸る途中、酒匂川の土手にかゝりますと、一人の松苗賣が、

『兄さん、松苗を買つて呉れないか。二百本ばかり持つて出たが、朝からまだ一本も賣れないで困つてゐる。助けると思つて買つて呉れないか。』

と頼みます。同情心に篤い金次郎は、考へるところあつてから、

『わたしは、こゝに二百文持つてゐる、このお金でそれを全部賣つて下さい。』

と、突然のいひ出しに松苗賣もちよつと驚いたが、もてあましてゐる苗のことであるから、喜んでそれを全部金次郎に賣りました。

金次郎はその松苗をすぐに堤に植ゑて歸りました。これが今の酒匂川の堤防に續いてゐる松の木立で、土手の固めとなつて何度か酒匂川の氾濫を防ぎとめたことです。普通ならば遊びざかりの少年が、何十年後のことを考へて、折角働いてもうけた金を惜しげもなく投げ出して仕舞ふとは、實に驚くべきことではないでせうか。

尊德先生は宗教家ではなかつたけれども、その遺された事業の跡を見ると、宗教的教養と信念と

があつて始めて出來得る底のもので、先生は實に佛敎の所謂菩薩行の實踐者であつたと申せまし
う。かうした信念と敎養とは、矢張少年時代から養はれてゐたものでした。

先生卽ち金次郎は、父親が亡くなつてから、その冥福をお祈りするために、時折隣村の飯泉の觀音堂に參詣いたしました。ある夜、その觀音堂へお詣りしますと、一人の旅僧が熱心にお經を讀んでゐます。金次郎は、靜かにそれを聽いてゐましたが、お經がすむと、

『失禮ですが、只今あなた樣がお讀みのお經は、何といふお經でございますか。わたしは今のやうなありがたいお經を、これまで一度も聽いたことがありません。』

と、たづねると、

『今のは觀音經といふお經です。』

、旅僧が答へました。

『觀音經ならば、わたしも時々聽いてゐますが、今のお經と少しちがふやらに思ひます。』

と云ふと、旅僧は、

『お經の讀方には二通りある。普通の讀み方は、音讀で、わたしが今讀んだのは、訓讀といふので

す。』

と、親切に敎へました。金次郎は大いに喜んで、

『どうぞ、もう一度お聽かせ下さい。』

といつて、その時持つてゐた何がしかの錢を出して、旅僧に布施して再讀を乞ひました。

金次郎は栢山へ歸つて善榮寺といふお寺へ行つて、そこの和尙さまに面會し、

『和尙さん、觀音經といふお經はほんたうに有りがたいお經ですね。觀音樣のお德の廣大無邊なことを、あのお經によつてはじめて知りました。佛さまのお心も、やはり大ぜいの人の濟度といふことにあると見えますね。』

と、云ひましたので、和尙さんは驚いて、

『お前は、えらいことを知つてゐるな。一體、それは誰に聞いたかね。』

と、訊ねましたので、金次郎は旅僧の話をしますと、和尙さんは非常に感心して、

『わしは六十歳を超えた老人で、何十年となく朝夕、このお經を讀んでゐるが、お前ほどはつきり知らない。お前の賢いのには全く感心した。この寺へ來て、坊さんになつてはどうだ。』

と、すゝめましたが、金次郎は頭を左右にふつて、

『御親切はありがたう御座いますが、わたくしには潰れた二宮家を興し、先祖の靈を安んずる大切な役目があります。折角のありがたいお志ですが、おことわり申上げます。』

と、辭退したと云ふことです。

この話を聞いても、金次郎が幼少から極めて宗教的情操が豊かであつて、それが土臺になつて後世萬人から敬慕せられるやうな大人物になつたことゝ思はれます。

四、出世の端緒

金次郎が二宮家を完全に復興した頃、小田原藩の大久保加賀守忠眞侯の家老で、千三百石の祿を貰つてゐる服部十兵衛といふ人がゐましたが、經濟のことに疎い人でしたから、出費がふへ殿様から戴く俸祿だけでは生計がつかなくなり、よそから借金して生計を立てるといふ有様でした。その借金が積り積つて一千兩を超えるといふ始末で、收入の全部を以てしても利子拂ひに困るといふ狀

態で、このまゝでは一二年もしたら破産せねばならなかつたのです。

どうかして家政を改めねばならぬと思つてゐる頃、栢山村の金次郎が辛苦して廢れた家を興したばかりか、道德と經濟の道に秀でてゐるといふことを聞いて、この人を擧げて家をとゝのへて貰ふやうにと、すゝある人がありました。服部氏は非常に喜んで、金次郎に頼んでみることにいたしました。金次郎は謙遜して再三再四辭りましたが、遂にその熱心に動かされて服部家の整理を引き受けることになりました。

併し漫然と引受けたのでなくて、自から信ずる所があつたからです。故にその整理を引受けるに當つて、

『御當家は、祿千二百石といひながら、小田原藩の財政の不如意によつて實際頂戴してゐる祿米は四百三俵、それに負債が一千兩と仰せられる。祿はあつても、もう他人の所有と同じことです。祿のない者が祿のあるやうにやつて行く、到底不可能なことです。今までの生活を改めずに、お金が足りなくなれば借りて來てやつて行くやうでは、ます〳〵借金がふへるばかりです。肝腎なことは今までの生活を改めて借金を返へすことです。御家老さまにお伺ひ申しますが、これから、(一)食

は飯汁に限ること、(二) 衣服は綿服に限ること、(三) 必ず無用のことを好まない。この三箇條を、お守り下さるかどうか。』

主人は、直に答へて、

『それくらゐなことは何でもない。必ず守ることを誓ふ。』

金次郎は、更に服部家の下男下女を集めて、

『みなの知つてゐるとほり、御當家は御家計が頗る困難に陥つてゐる。そこで御主人はその整理をわたしにお任せになつたのだ。みなのうちによい考へがあるならわたしに教へて下さい。さもなければ、五年の間、わたしの指圖どほりに働いてもらひたい。』

といひ渡しました、一同はみな金次郎の指圖に従ふことを誓ひました。

かくて金次郎は、服部家回復の仕法を立てた。仕法といふのは計劃のことである。金次郎は、服部家の財政を詳しく調べ、收入よりも支出を少なくするやうに、なるべく節約して無用の雜費を省いた。そして年々少しづゝ殘つたお金で、今までの借金を返へして行くやうにした。金次郎は、お金の貸主を呼んで、事情を話して、五年間に負債の全部を返へすことを約束した。自分は下男や下

女と同じやうに働いて、主人が外へ出る時には若黨となつてお供をし、夜になれば、家を治め國を治める道を說いて聞かせました。

金次郎の苦心によつて、服部家の財政は、だん〳〵順調に向ひ、五年たつと、借金が悉く返へし盡されたのみならず、三百兩ほどのお金があとに殘つた。服部一家の喜びは譬へやうもなかつた。

金次郎は、三百兩のお金を主人の前にさし出して、

『五年の間、わたしが申し上げたとほりに、よくこそ御辛棒くださいました。これで、御當家の負債は、すつかりなくなり、こゝに三百兩のお金が殘りました。百兩は御主人さまのお手許に、百兩は奥方さまのお手許にお備へおき下さつて、非常の時の御用にお立てなさるやうに、殘る百兩は、御自由におつかひ下さいませ。』

と、いつた。十兵衞夫妻は、金次郎の潔白な心に深く感じ入り、

『今日のやうに當家の復興が出來たのも、みなお前のお蔭である。五年の間家業を棄てゝ當家のためにつくしてくれたお禮としては、少ないけれども、百兩だけは、お前にあげる。快く受け取つてもらひたい。』

と、いつた。金次郎がいくらことわつても諾き入れないので、

『それでは、ありがたく頂戴いたします。』

と、金次郎は、百兩のお金を受取つて退きました。それから下男下女を呼んで、

『これまでよくわたしのいふとほりに働いてくれました。御當家もこれで、すつかりもと通りになつた。これは御主人様の御褒美だ。』

といつて、貰つたお金をみな分けてやり、一文も持たずに瓢然と栢山の家へ歸つて行きました。

金次郎が、かく服部家の仕法にかゝり、着々と成績を擧げたので、小田原藩士は非常に驚き、よるとさはると、金次郎の評判をした。金次郎の名聲は藩内誰れ知らぬ者もないほどであつた。

かくて栢山の百姓金次郎も、二宮先生と尊敬せられる身分となりました。

五、畢世の大事業

二宮先生の評判は、いつしか小田原藩主大久保忠眞侯の耳に入つた。當時小田原藩も財政兎角不

如意で、窮乏をうつたへてをつたときでしたから、服部家の家政整理に好成績を擧げた二宮金次郎の風評に感動せられた大久保侯は、『もし二宮を登庸して當藩の財政を處理せしめたならば、藩の窮乏は救はれるかも知れない』と考へて、近臣に諮られた。けれども近臣たちは、口を揃へて、

『小田原藩全體が、一人の百姓の指圖を受けるやうになつては堪へられない。』

といつて、反對した。よつて、大久保侯は近臣の意見を容れて、二宮先生の登庸は思ひとゞまり、その代り、野州櫻町の興復を仰せつけました。

櫻町は、大久保侯の分家に當る旗本宇津某の領地になつてゐました。土地が痩せてゐて、五穀の收穫が少なく放縱無賴の民が多くて、人氣の頗るわるいところであつた。元祿年中までは四百五十戸ほどであつた戸數が、次第に離散して、文政の頃には、百四五十戸に減つてしまつた。農民は、遊惰に流れ、常に爭論や訴訟の絶えた時がないといふ難村であつた。正直に稅を納める者が少なく宇津家も窮乏の極に達してゐた。大久保侯は、これまでに度々人を遣はし、多くの費用をかけて、復興を計られたが、一度も成功した者がなかつた。そこで、今度、この大役を二宮先生に仰せつけられたのである、金次郎は、

『わたくしの如き、貧しい農家に生れた者に、どうして、國を興し、民を安んずる道がわかりませう。君命の重いことは知つてゐますが、不肖の身にはお引受けいたしかねる。』

と、固辭しました。ところが、大久保侯は、なか〳〵お許しがなく、再三使者を出して御下命になつた。たうたう二宮先生も、大久保侯の厚い仁慈に感じて遂にお引き受けすることになりました。

文政四年に、二宮先生は、櫻町を視察すること四回、土地の肥瘠、貧富の程度、人民の勤惰を探り、大久保侯に次のやうな意見を述べられた。

『櫻町は、土地瘠せて、人民も非常に怠惰です。これを振興するには、仁術の一手があるのみです。仁政が行はれなければ、四千石の年貢を全部免除しても決して人民を貧困から救ふことは出來ません。徒らに多くの費用を投じても、それは、結局、人民を怠惰ならしめるだけのことです。今後、金錢を費やすことをやめて、仁政を施すやうになさつたがよろしい。』

大久保侯は、

『だが、多くの費用をかけても復興の出來ないものが、費用なしに出來るであらうか。』

二宮先生はきつぱりと、答へられました。

『出來ます。金錢を費やせば、役人も、村民も、金錢に目がくれて、互に自分の利益をはからうとして、醜い爭ひをはじめ、人情がますます頽廢して行きます。それよりも、荒地を開くには、荒地の力を以てし、貧乏を救ふには、貧乏の力を以てするがよろしい。例へば荒地一反を開いて、一石の米が穫れるとすれば、その内の五斗を耕作者の食料に與へ、殘りの五斗を次の年の開墾費用とするのです。年々、さうして行けば、何億町歩の荒地も、費用なしで開くことが出來ます。』

二宮先生は、更に詳しく、費用をかけずに、櫻町を復興させる方法を說かれた。大久保侯は、感心して、

『それは名案である。萬事、お前に委託するから、よろしく賴む。』

と仰せられました。

文政六年三月、二宮先生は、家財道具を賣り拂ひ、栢山の家をたゝみ、夫人と三歲になる彌太郎と云ふ子供をつれて、櫻町へ移住されました。この大事業を成就して、君命を全うしなければ、再び故鄕の土を踏まないといふ悲壯な決心を起されたのであります。

櫻町へ移住して見て、人民の墮落が、今まで考へてゐたよりも、更に一層甚だしいことが、わか

りました。男女の區別なく酒を呑み、博奕に耽り、仕事もせずに遊んでゐる者が多く、人の善事を惡み、人の惡事災難を喜び、他人を苦しめても、自分の利益を得ようとして、喧嘩ばかりしてゐました。役人は人民を虐げ、人民は役人を憎み、互に仇敵のやうに、いがみ合つてゐました。

二宮先生は、少しも屈せず、大久保侯に誓つたとほり、仁政を施して人情を一變し、一鍬づゝ荒地を開いて行く方針で、夜となく晝となく、心を碎いて領内を見廻られました。村役人の中には、表面だけ先生の指揮に從ふやうに見せかけ、蔭へまはつて、愚民を煽動し、先生を苦しめる奸惡な者もありました。二宮先生と一緒に、小田原から派遣されてゐる役人の中にも、二宮先生の身分を侮り、名聲を疾み、奸惡な村役人や無賴な人民と通じて、先生の事業を妨害する不埒な者もありました。人民の放縱を訴へる役人、役人の非道を訴へる人民、喧嘩口論の絶えた日はありませんでした。先生は寢食を忘れて、復興事業のために力をつくされました。訴訟は、双方の言ひ分をよく聽いて、理非曲直を裁斷せられました。善人はこれを表彰し、惡人はこれを說諭して、善にかへらせようと力めました。

元來、櫻町の復興は、官民の協力一致によらなければ、成功しない難事業であつたが、先生より

も上席の役人が、先生の計劃を妨害するのであるからたまらない。先生の獻身的な努力も、その甲斐なく、豫期した成績も擧らないうちに、いつしか數年の歲月が過ぎ去りました。

復興事業がはかどらないのは、領内の戶數が非常に減じて、勞力が不足してゐることが、重大な原因であつたから、二宮先生は、他國の移民を招いて勞力の不足を補はうと企てられました。二宮先生に反對の役人は、これを一つの口實にして、『二宮は、新移民を優遇して土着民を疎略にする』といつて、小田原侯に讒言しました。小田原侯は、餘儀なく、先生を召還して、これを質されたが先生の誠意がわかると、前にも增して信賴の度を加へました。

あまり萬事が意の如くならないので、先生は、文政十二年には、成田山に參籠して、櫻町復興事業の成就を祈願されました。その後次第に仕法の効果が見えて來て、先生の誠意が、多くの百姓たちにも通じて、今まで事毎に先生の事業を妨害しようとした人達も過ちを改めて先生の膝下に平伏することになりました。荒地は、日に月に開けて、農作物は豊かに實るやうになりました。今まで八百俵ぐらゐしか納まらなかつた年貢米が千俵を起えるやうになつて、櫻町はやうやく復興の曙光がさしそめてまゐりました。

六、東奔西走

櫻町の復興は、二宮先生にとつては、全く命がけの大事業でありました。この事業に成功した先生の名聲は、ます〳〵高くなつて、各地から先生の仕法を乞ひ、教へを願ふ者が、續々と現はれて來ました、これから二十數年に亘る先生の大活動を、到底この小冊子には書きつくすことは出來ません、今日殘つてゐる仕法書を見ただけでも、これが人間一代に出來ることかと思はれるほどであります。玆に、その仕法の中、最も有名なものだけを簡單に列記しておきませう。

青木村の仕法　常陸國眞壁郡青木村は、櫻町を距ること三里で、旗本川副勝三郎の領地になつてゐました。もと戸數が、百三十戸ほどもあつたが、時々、洪水が出て、櫻川の堰を流して、水田を荒したので、次第に住民が減り、惰弱な貧民が二十九戸しかない寒村となりはて〻仕舞ひました。そこで、名主が江戸の領主に相談して櫻町に二宮先生を訪ねて仕法を乞ひました。先生は、最初辭退せられましたが、名主の熱心さに動かされて、櫻川に堰をつくり、水害を防ぎ、民俗の一變をは

かられたので、數年の中に富裕な村となりました。

谷田部の仕法　常陸の國筑波郡の四十二箇村と下野の國茂木の二十七箇村は、谷田部侯細川長門守興建公の領地になつてゐました。谷田部侯は、肥後の細川氏の分家であつたが、財政よろしきを得なかつたので、十二萬兩の負債を生じました。本家の方でも、多額の補助をしましたが、効能がないので、見切つてしまひました。谷田部侯は、二宮先生の名聲を聞いて、櫻町に使者を出して、窮狀を訴へて仕法を乞ひました。二宮先生は出入の帳簿を持參せしめて詳細に調査し、計劃を立て門生を谷田部に派して、仕法を實施せしめられました。數年のうちには負債の大半を返還することが出來ました。

烏山の仕法　烏山藩主大久保佐渡守は、小田原侯の一族で、下野國那須郡烏山地方の四十七箇村と、相摸國愛甲郡厚木地方とを領地とし、祿高四萬石と稱せられてゐた。烏山地方は、文政の末年から、次第に衰頽して、人口が減り、荒蕪地が多くなつた。そこへ、天保七年の飢饉が襲來したので、人民の生活は、實に慘憺たるものとなり、木の根、草の根を食つて、漸く餓をしのぐといふ有樣であつたが、藩の收入が減少してゐるために、救濟することが出來なかつた。藩士菅谷八郎右衛

門は、天性寺の圓應和尚と相談して、二宮先生の仕法を仰ぎました。二宮先生は、最初、固辭せられたが、二人の熱心に動かされて、承諾せられ、先づ救助米を送つて、窮民を救ひ、領内發展の仕法を示されました。その結果、二三年後には、田を開くこと二百二十四町歩、米二千俵の増收を見るに至りました。

下館の仕法　下館藩主石川近江守は、常陸の國の眞壁郡三十箇村、一萬四千二百二十石の外に、河内の國石川郡にも五千石の領地を有する大名でありましたが、三萬兩の負債に苦しみ、天保九年郡奉行衣笠兵太夫を派遣して、二宮先生の仕法を仰ぎました。再三懇願して、漸く承諾を得、その仕法により、負債を皆濟したのみならず、剰餘金を生じ、領内の窮民の跡を絶つに到りました。

小田原の仕法　前にも述べたとほり、小田原藩主大久保忠眞侯は、深く二宮先生を信頼せられましたが、藩内には、二宮先生に反對するものがあつて、櫻町の復興にさへも異議を唱へたほどでした。從つて、小田原侯は、非常に疲弊してゐるにも拘はらず、仕法の實施が容易に行はれませんでした。けれども、天保七年の飢饉には、到頭先生の力を借りなければならなくなりました。小田原藩では、二宮先生に出府を命じました。二宮先生は、

『わたくしは、櫻町の復興が完了しなければかへらない約束をして來た者です。この凶時に上京することは出來ません。御用があらば當地までお越し下さい。』

といふ返辭をせられました。使者は、大に怒つて歸り、藩主に復命しました。だが、明君であられる大久保侯は、

『二宮のいふことは理の當然だ。』

と仰せられて、『小田原の人民を救ふために抵げて出府せよ』といふ再度の命を下されました。

二宮先生は、天保七年十二月、出府せられまして、飢饉の救濟、難村の立て直し等の具體案を立てられました。これが小田原に仕法の行はれた發端であります。

天保十年、瀕死の難村曾比・竹松の二村（共に足柄上郡）を忽然と一新せしめられてから、約十年間に仕法を實施して好成績を擧げた村は、七十餘の多きに及びましたが、弘化三年、先生の盛名に嫉妬する反對者の妨害により中止の止むなきに至りましたことは、殘念なことであります。

その他の仕法　その他、二宮先生の教を受けて、家政を整理し、廢家を再興した例は、數へきれないほど澤山にあります、例へば下野國横田村の名主圓藏、相摸伊勢原の加藤宗兵衛、大磯の川崎

屋彌右衛門の話などは、今日でも美談として傳へられてゐます。

日光の仕法（幕府の登庸）難村櫻町の復興は、一時に先生の名を天下に轟ろかしました。天保十三年七月、江戸の小田原藩邸から急使が櫻町に到着しました。書面には、

『水野越前守様から御沙汰につき、早々、出府いたすやうに。』

といふ意味のことが書いてありました。

二宮先生は、すぐに出府せられました。さうして、幕府に仕へることになりました。時に、先生は、五十六歳でありました。

間もなく先生は、幕府から下總へ出張の命を受け、富津の陣屋に至り、利根分水路、印旛沼、手賀沼を視察踏査してかへられました。初め幕府では、代官篠田藤四郎の請願により、先生に印旛沼開鑿の大工事を計劃せしめるつもりでありましたが。先生の實地踏査の結果、到底行はれないことがわかりました。

天保十四年、眞岡に駐在を命ぜられ、その翌年弘化元年日光神領仕法の大命が下りました。先生は大に喜ばれて、

『今度は、その土地限りの施設でなく、何れの土地にも適する仕法の標準を作らう。』

といつて、その立案に沒頭せられました。三年後に出來上つた仕法雛形は、六十四冊といふ大冊子でありました。當時幕府の實力が衰頽して居たので、苦心してつくつた仕法雛形も、提出してから何の音沙汰もありませんでした。先生の失望のほどが思はれます。

それから八年たつて、嘉永六年二月、漸く日光神領二萬石、八十九箇村の仕法を命ずるといふ沙汰がありました。門人たちは手を拍つて喜んだのでしたが。先生は、既に六十七歳、天壽漸く終りに近づいてゐたのであります。

七、不滅の燈

日光神領仕法の大命が下つたその年（嘉永六年）の四月十八日、二宮先生は病氣に罹られました。先生は體格が頑丈で、非常に壯健な人でしたが、心身の過勞の結果、遂に病床に臥する身となられたのであります。眞岡附近の人々は、大に心配して、一日も早く癒くなられんことを神佛に祈

つたのであります。

五月、幸に全快せられたので、先生は日光に入り、三箇月の間、山野を跋渉して、仕法に着手せられたのでありますが、やがて、再び病床の人となられてしまひました。それから約三年間、病氣は、だん〳〵重くなり、安政三年十月二十日の朝、遂に逝去せられました。歳は丁度七十歳であられました。遺族は、歌子夫人と令息孫太郎の二人で、門人富田高慶の夫人となつた娘ふみは、三年前に亡くなつてゐました。

二宮先生の一生涯は、苦難と奮闘の連續でありました。栢山といふ一寒村の、而も極めて貧しい百姓の家に生れ、幼ない時から、血を吐くやうな艱難辛苦と戰ひ、その間に學問を勵みつゝ、一たん潰れた家を興したのみならず、先生の家と同じ運命に瀕しつゝあつた何軒もの家や何箇村もの村を更生せしめ、人を導き世を救はれました。幼年時代の艱難、櫻町時代の辛苦と奮闘、それらの話は、唯もが必ず興奮感激を禁じ得ないものであります。先生の一生涯そのものが炳として永遠に輝くところの教でありをす。

先生の一生涯を一貫するところのものは、至誠と實行の二つであります。苟も誠心と勤め勵んで

止まない實行精神を以てしたならば、貧しい者も必ず富み、衰へた者も必ず榮え、如何なる困難にも必ず克ち得るといふ道を、身を以て教へられたのであります。

世人はやゝもすると、二宮先生を目して、吝箇に暮らして小金を蓄めたり、或は、荒地を開いたり、敗村廢家を興したりする經濟の道を教へた人とする者はゐるが、先生はさうではない。經濟の根本に道德宗教がなければならぬ、道德宗教があつて始めて經濟的利益が收められるのであることを教へられたのであります。

先生の教を報德教といひます。報德とは、天地人三才の德卽ち天地自然と社會國家の恩に報いるといふ意味です。如何にして報いるか、人道を盡して報いるのです。人道とは、至誠と勤勞と分度と推讓との四つであります。これが報德教の四綱領です。至誠といふのは、私慾を去つて、良心の命に從ふこと、勤勞といふのは、自然に打ち勝つて人類の繁榮をはかること、分度といふのは、天命の宗分に從つて、法度を立てること、推讓といふのは、餘れる分を他に讓ること、これをくだいて云へば、『まごころをこめ、せい出して働き、分に應じて節約し、餘つたものを他に讓れ』といふことになります。

先生の教は、かくの如く、道德と宗教と經濟とを固く結びつけたものであります。而も單なる空理空論ではなくして、自ら實行し來つた體驗に基いてゐるのであります。かうした教を說かれた人は世界に二宮先生を措いて一人もない。この點に於て先生は、われ等日本人が世界に誇るべき偉人であると云へませう。

二宮先生の功勞を思ひ、その德と教を慕ふ者、先生の沒後次第に多くなりました。また門人の富田高慶、福住正兄、岡田良一郎等の人々は、先生の言行を記錄し、且つその教を天下に宣傳しました。

遂に、明治二十四年には、御贈位（從四位）の御沙汰があり、つゞいて、二十七年には小田原に報德二宮神社が、三十年には今市に報德二宮神社が建てられ、何れも今日では縣社に列せられてゐます。その他櫻町の陣屋にも、北海道豐頃村にも、村社として奉祀せられてゐる二宮神社があります。最近では各地の工場や學校に二宮先生を奉祀せるもの、先生の銅像を建設するものが非常に多くなりました。

栢山の一百姓として生れられた先生は、かくして萬民の永遠不滅の燈となることになりました。

後篇

尊德先生語錄

誠の道——夫れ誠の道は、學ばずしておのづから知り、習はずしておのづから覺へ、書籍もなく記錄もなく、師匠もなく、而して人々自得して、忘れず、是れぞ誠の道の本體なる。渴して飲み飢へて食む、勞れていねまめて起く、皆此の類なり。古歌に「水鳥のゆくもかへるも跡たえてされども道は忘れざりけり」といへるが如し。夫れ記錄もなく、書籍もなく、學ばず習はずして、明かなる道にあらざれば誠の道にあらざるなり。

天道と人道——夫れ、世界は旋轉(せんてん)してやまず。寒往けば暑來り、暑往けば寒來り、夜明れば晝となり、晝になれば夜となり、又萬物生ずれば滅し、滅すれば生ず。譬(たと)へば錢を遣れば品が來り品を遣れば錢が來るに同じ。寢ても覺めても、居ても歩いても昨日は今日になり、今日は明日になる。田畑も、海山も皆その通り、奚(こ)にて薪をたきへらすほどは、山林にて生木(せいぼく)し、奚で喰ひへらす丈(だけ)の穀物は、田畑にて生育す。野菜にても、漁類にても、世の中にて減(へ)るほどは、田畑・河海・山林に

て生育し、生れたる子は、時々刻々年がより、築たる堤は時々刻々に崩れ、掘りたる堀は日々夜々に埋り、葺たる屋根は、日々夜々に腐る。是れ即ち天理の常なり。然るに人道は、是と異なり。如何となれば、雨風定めなく、寒暑往來する此の世界に、毛羽なく鱗介なく、裸體にて生れ出で、家がなければ雨露が凌がれず、衣服がなければ寒暑が凌がれず。奚に於て、人道と云ふ物を立て、米を善とし、莠を悪とし、家を造るを善とし、破るを悪とす。皆人の爲に立てたる道なり。依つて人道といふ。天理より見る時は善悪はなし。其の證には、天理に任かする時は、皆荒地となりて、開墾のむかしに歸るなり。如何となれば、是れ則ち天理自然の道なればなり。夫れ天に善悪なし。故に、稻と莠とを分かたず種ある者は牛育せしめ、生氣ある者は皆發生せしむ。人道はその天理に順ふといへども、其内に各區別をなし、稗莠を悪とし、米麥を善とするが如き、皆人身に便利なるを善とし、不便なるを悪とす。奚に到りては天理と異なり、如何となれば人道は人の立つる處なればなり。人道は譬へば料理物の如く、三倍酢の如く、歴代の聖主賢臣料理し鹽梅して拵へたるものなり。されば、ともすれば破れんとす。故に政を立て、教を立て、刑法を定め、禮法を制し、やかましくうるさく世話をやきて、漸く人道は立つなり。然るに天理自然の道と思ふは、大なる誤なり。

能く思ふべし。

夫れ人道は譬へば、水車の如し。其の形半分は水流に順ひ、半分は水流に逆ふて輪廻す。丸に水中に入れば廻らずして流るべし。又水を離るれば廻る事あるべからず。夫れ佛家に所謂知識の如く、世を離れ欲を捨てたるは、譬へば水車の水を離れたるが如し。又凡俗の教義も聞かず義務もしらず。故に人道は中庸を尊む。水車の中庸は、宜き程に水中に入れて、半分は、流水に逆昇りて、運轉滯らざるにあり。人の道もその如く、天理に順ひて種を蒔き、天理に逆ふて草を取り、欲に隨ひて家業を勵み、欲を制して義務を思ふべきなり。

夫れ人道は人造なり、されば自然に行はるゝ處の天理とは格別なり。天理とは、春は生じ秋は枯れ、火は燥けるに付き、水は卑に流る。晝夜運動して萬古易らざる是れなり。人道は日々夜々人力を盡し、保護して成る。故に天道の自然に任かすれば、忽ちに廢れて行はれず。故に人道は、情欲の儘にする時は立たざるなり。譬へば漫々たる海上道なきが如きも、船道を定め是によらざれば、岩にふるゝなり。道路も同じく、己が思ふ儘にゆく時は突當り、言語も同じく、思ふまゝに言葉を發する時は、忽ち爭を生ずるなり。是に仍りて人道は、欲を押へ情を制し勤め〳〵て成る物なり。

夫れ美食美服を欲するは天性の自然、是をため是を忍びて家産の分内に隨はしむ。身體の安逸奢侈を願ふも又同じ。好む處の酒を控へ、安逸を戒め、欲する處の美食美服を押へ、分限の内を省きて有餘を生じ、他に讓り向來に讓るべし。是を人道といふなり。

天理は萬古變ぜず。人道は一日怠れば忽ちに廢す。されば人道は勤むるを以て尊しとし、自然に任ずるを尊ばず。夫れ人道の勤むべきは、己に克つの敎なり。己は私欲なり。私欲は田畑に譬ふれば草なり。克つとは、此の田畑に生ずる草を取捨つるを云ふ。己に克つは、我が心の田畑に生ずる草をけづり捨て、我心の米麥を繁茂さする勤なり。是を人道といふ。論語に己に克つて禮に復ると あるは此の勤めなり。

人界に居て家根のもるを坐視し、道路の破損を傍觀し、橋の朽たるを憂へざる者は、則ち人道の罪人なり。

人の生涯——親の子における、農の田畑に於ける、我道に同じ。親の子を育つる無賴となるといへども、養育料を如何せん。農の田を作る、凶歲なれば、肥代も仕付料も皆損なり。夫れ此道を行はんと欲する者は此理を辨ふべし。夫れ人、生れ出たる以上は死する事のあるは必定なり。長生と

いへども、百年を越ゆるは稀なり。限りのしれたる事なり。天と云ふも壽と云ふも實は毛弗の論なり。譬へば蠟燭に大中小あるに同じ。大蠟といへども、火の付きたる以上は、四時間か五時間なるべし。然れば人と生れ出たるうへは、必ず死する物と覺悟する時は、一日活きれば則ち一日の儲、一年活きれば一年の益なり。故に本來我身もなき物、我家もなき物と覺悟すれば跡は百事百般皆儲なり。予が歌に、「かりの身を元のあるじに貸渡し民安かれと願ふ此身ぞ。」夫れ此世は我人ともに僅かの間の假の世なれば、此身ばかりの身なる事明かなり。元のあるじとは天を云ふ。このかりの身を我身と思はず、生涯一途に世のため人のためのみを思ひ國のため天下の爲に、益ある事のみを勤め、一人たりとも一家たりとも一村たりとも、困窮を免れ富有になり、土地開け道橋整ひ安穩に渡世の出來るやうにと、夫れのみを日々の勤とし、朝夕願ひ祈りておこたらざる我此身であるといふ心にてよめる也。是れ我畢世の覺悟なり。我道を行はんと思ふ者はしらずんばあるべからず。

道の難易——道の行はるゝや難し、道の行はれざるや久し。その才ありといへどもその力なき時は行はれず。其才その力ありといへども、其德なければ又行はれず。其德ありといへども、その位なき時は又行はれず。然れども是は是れ大道を國天下に行ふの事なり。その難きは勿論なり。然れ

ば何ぞ此人なきを憂へんや何ぞ其位なきを憂へんや。茄子をならするは茄子作り能くすべし。馬を肥やすは馬士能くすべし。一家を齊ふるは亭主能くすべし。或は兄弟親戚相結んで行ひ、或は朋友同志相結んで行ふべし。人々此道を行はゞ、豈國家興復せざる事あらんや。

儉約と吝嗇——世の中に事なしといへども變なき事あたはず。是れ恐るべきの第一なり。變ありといへども是れを補ふの道あれば變なきが如し。變ありて是を補ふ事あたはざれば、大變に至る。古語に、三年の貯蓄なければ、國にあらずと云へり。兵隊ありといへども武具軍用備はらざればすべきやうなし。只國のみにあらず。家も又然り。夫れ萬の事有餘無ければ、必ず差支出來て家を保つ事能はず。然るをいはんや、國天下をや。人は云ふ、我が敎、儉約を專らにすと。儉約を專らにするにあらず。變に備へんが爲なり。人は云ふ、我道、積財を勤むと。積財を勤むるにあらず。世を救ひ世を開かんが爲なり。古語に、飲食を薄うして孝を鬼神に致し、衣服を惡うして、美を黻冕に致し、宮室を卑うして力を溝洫に盡すと。能々吝か儉か待たずして明かなるべし。

小を積んで大となす——大事をなさんと欲せば、小さなる事を怠らず勤むべし。小積りて大となればなり。凡そ小人の常、大なる事を欲して小なる事を怠り、出來難き事を憂ひて、出來易き事を

勤めず。夫れ故終に大なる事をなすあたはず。夫れ大は小の積んで大となる事を知らぬ故なり。譬へば百萬石の米と雖も粒の大なるにあらず。萬町の田を耕すも其業は一鍬づゝの功にあり。千里の道も一歩づゝ歩みて至る。山を作るも一簣の土よりなる事を明かに辨へて、勵精小さなる事を勤めば、大なる事必なるべし。小さなる事を忽にする者、大なる事は必ず出來ぬものなり。

貯蓄と讓道——多く稼いで錢を少く遣ひ、多く薪を取つて焚く事は少くする。是を富國の大本、富國の達道といふ。然るを世の人是を吝嗇といひ、又强欲と云ふ。是心得違ひなり。夫れ人道は自然に反して、勤めて立つ處の道なれば貯蓄を尊ぶが故なり。夫れ貯蓄は今年の物を來年に讓る。一つの讓道なり。親の身代を子に讓るも、則ち貯蓄の法に基ひするものなり、人道は言ひもてゆけば貯蓄の一法のみ。故に是を富國の大本、富國の達道と云ふなり。

危急の心得——松明盡きて手に火の近付く時は速に捨つべし。火事あり危き時は荷物を捨てゝ逃げ出すべし。大風にて船くつがへらんとせば、上荷を刎ぬべし。甚しき時は帆柱をも伐るべし。此理を知らざるを至愚といふ。

己を捨てゝ人に隨ふ——夫れ空腹なる時、他にゆきて、「一飯をたまはれ予庭をはかん」と云ふと

も、決して一飯を振舞ふ者あるべからず。空腹をこらへて、まづ庭をはかば、或は一飯にありつく事あるべし。是れ己を捨てゝ人に隨ふの道にして、百事行はれ難き時に立ち至るも行はるべき道なり。我れ若年初めて家を持し時、一枚の鍬損じたり。隣家に行きて「鍬をかし呉れよ」といふ。隣翁曰く「今此畑を耕やし茶を蒔かんとする處なり。蒔き終らざれば貸し難し」といへり。我れ家に歸るも別に爲すべき業なし。「予此畑を耕やして進ずべし」と云ひて耕し、「茶の種を出されよ。序に蒔きて進ぜん」と云ひて、耕し且つ蒔きて、後に鍬をかりし事あり。隣翁曰く、「鍬に限らず何ても差支の事あらば、遠慮なく申されよ。必ず用達すべし」と云へる事ありき。斯の如くすれば、百事差支なきものなり。

みづからをかへり見よ——世の中の人を見よ。一錢の柿を買ふにも、二錢の梨子を買ふにも、眞頭の眞直ぐなる瑕のなきを撰りて取るにあらずや。又茶碗を一つ買ふにも、色の好き形の宜きを撰り撫て見、鳴らして音を聞き、撰りに撰りてとるなり。世人皆然り。柿や梨子は買ふといへども、惡しくば捨てゝ可なり。夫さへも此の如し。然れば人に撰ばれて、聟となり嫁となる者、或は仕官して立身を願ふ者、己が身に瑕ありては人の取らぬは勿論の事、その瑕多き身を以て、上に得られ

ねば、「上に眼のない」などゝ、上を惡しくいひ、人を咎むるは大なる間違ひなり。みづからかへり見よ。必ずおのが身に瑕ある故なるべし。夫れ人身の瑕とは何ぞ。譬へば酒が好きだとか、酒の上が惡いとか、放蕩だとか、勝負事が好きだとか、惰弱だとか、無藝だとか、何か一つ二つの瑕あるべし。買手のなき勿論なり。是を柿、梨子に譬ふれば、眞頭が曲りて澁そうに見ゆるに同じ。されば買はぬも無理ならず。能く勘考すべきなり。古語に、内に誠あれば必ず外に顯はるゝとあり。瑕なくして眞頭の眞直ぐなる柿の賣れぬと云ふ事あるべからず。夫れ何ほど草深き中にても、蓁蔬があれば、人が直ぐに見付けて捨てゝはおかず。又泥深き水中に潛伏する鰻、鰌も、必ず人の見付けて捕へる世の中なり。されば内に誠ありて外にあらはれぬ道理あるべからず。此道理を能く心得、身に瑕なきやうに心がくべし。

富家の子弟を論す——農にしても、商にしても、富家の子弟は、業として勤むべき事なし。貧家の者は活計の爲に勤めざるを得ず。且富を願ふが故に自ら勉强す。富家の子弟は、譬へば山の絶頂に居るが如く、登るべき處なく、前後左右皆眼下なり。是に依つて分外の願を起し、士の眞似をし増長に増長して終に滅亡す。天下の富者皆然り。爰に長く富貴を維持し、富貴を保つべきは、只我

道推讓の教あるのみ、富家の子弟、此推讓の道を踏ざれば、千百萬の金ありといへども、馬糞芽と何ぞ異らん。夫れ馬糞芽は季候に依つて生じ、幾程もなく腐廢し、世上の用にならず。只徒らに生じて徒らに滅するのみ。世に富家と呼ばはるゝ者にして、如斯なる豈惜しき事ならずや。

善惡・禍福・吉凶――善惡の論甚だむづかし。本來を論ずれば、善も無し惡もなし。善と云つて分かつ故に、惡と云ふ物出來るなり。元人身の私より成れる物にて、人道上の物なり。故に人なければ善惡なし、人ありて後善惡はある也。故に人は荒蕪を開くを善とし、田畑を荒らすを惡となせども、猪鹿の方にては、開拓を惡とし、荒らすを善とするなるべし。世法盜を惡とすれども、盜中間にては、盜を善とし、是を制する者を惡とするならん。然れば如何なる物是れ善ぞ。如何なる物是れ惡ぞ。此理明辯し難し。此理の尤も見安きは遠近なり。遠近と云ふも善惡と云ふも理は同じ。譬へば杭二本を作り。一本には遠しと記し、一本には近しと記し、此二本を渡して「此杭を汝が身より遠き所と近き所と二所に立つべし」と云ひ付ける時は、速かに分る也。予が歌に「見渡せば遠き近きはなかりけりおのれ〳〵が住處にぞある」と。此歌善きもあしきもなかりけりといふ時は、人身に切なる故に分らず。遠近は人身に切ならざるが故によく分かる也。工人に曲直を望むも餘り目

に近か過ぎる時は見えぬ物なり。さりとて遠過ぎても又眼力及ばぬ物なり。古語に「遠山木なし、遠海波なし」といへるが如し。故に我身に疎き遠近に移して論す也。夫れ遠近は己が居處先づ定りて後に遠近ある也。居處定まらざれば、遠近必ずなし。「大阪遠し」といはゞ、關東の人なるべし。「關東遠し」といはゞ、上方の人なるべし。禍福吉凶是非得失皆是に同じ。禍禍も一つなり。善惡も一つなり。得失も一つ也。元一つなる物の半を善とすれば、其半は必ず惡也。然るに其半に惡なからむ事を願ふ。是れ成り難き事を願ふなり。夫れ人生れたるを喜べば、死の悲しみは隨つて離れず。咲きたる花の必ずちるに同じ。生じたる草の必ず枯るゝにおなじ。涅槃經に此譬へあり。或人の家に容貌美麗端正なる婦人入り來る。主人、「如何なる御人ぞ」と問ふ。婦人答へて曰く、「我は功德天なり。我至る所吉祥福無量なり」。主人悅んで請じ入る。婦人曰く「我に隨從の婦一人あり。必ず跡より來る。是をも請ずべし」と、主人諾す。時に一女來る。容貌醜陋にして、至つて見惡し。如何なる人ぞと問ふ。此女答へて曰く、「我は黑闇天なり。我至る處、不祥災害ある無限なり」と。主人是を聞き大に怒り、「速に歸り去れ」といへば、此女曰く、「前に來れる功德天は我が姉なり。暫も離るゝ事あたはず。姉を止めば我をも止めよ。我をいださば姉も出せ」と云ふ。主人暫く考へ

て、二人とも出しやりければ二人連れ立つて出て行きけり、と云ふ事ありと聞けり。是れ生者必滅會者定離の譬へなり。死生は勿論禍福吉凶、損益得失皆同じ。元禍と福と同體にして一圓なり。吉と凶と兄弟にして、一圓なり。百事皆同じ。只今も其通り。通勤する時は、近くてよいといひ、火事だと云ふと遠くてよかりしと云ふ也。是を以てしるべし。

富は人の欲する處なり。然りといへども、己が爲にするときは禍是に隨ひ、世の爲にする時は、福是に隨ふ。財寶も又然り。積んで散ずれば福となり、積んで散ぜざれば禍となる。是れ人々知らずんばあるべからざる道理なり。

變通——何事にも變通といふ事あり。しらずんばあるべからず。則ち權道なり。夫れ難きを先にするは、聖人の教なれども、是は先づ仕事を先にして、而して後に賃金を取れと云ふが如き教なり。爰に農家病人等ありて、耕耘手後れなどの時、草多き處を先にするは世上の常なれど、右樣の時に限りて、草少く至りて手易き畑より手入れして、至りて草多き處は最後にすべし。是尤も大切の事なり。至つて草多く手重の處を先にする時は大に手間取れ、其間に草少き畑も皆一面草になりて、何れも手後れになる物なれば、草多く手重き畑は五畝や八畝は荒らすとも、儘よと覺悟して

暫く捨て置き、草少く手輕なる處より片付くべし。しかせずして手重き處に掛り、時日を費す時は儘かの畝歩の爲に總體の田畑、順々手入れ後れて、大なる損となるなり。國家を興復するも又此理なり。しらずんばあるべからず。又山林を開拓するに、大なる木の根は其儘差置いて、廻りを切り開くべし。而して三四年を經れば、木の根自ら朽ちて力を入れずして取るゝなり。是を開拓の時一時に掘取らんとする時は勞して功少し。百事その如し。村里を興復せんとすれば、必ず抗する者あり。是を處する又此理なり。決して拘はるべからず、障るべからず。度外に置きてわが勤を勵むべし。

天命と人道——今日は則ち冬至なり、夜の長きは則ち天命なり。夜の長きを憂ひて、短くせんと欲すとも如何ともすべなし。是を天と云ふ。而して此行燈の皿に油の一杯ある是も天命なり。此一皿の油、此夜の長きを照らすにたらず。是又如何ともすべからず。共に天命なれども、人事を以て燈心を細くする時は、夜半にして消ゆべき燈も曉に達すべし。是人事の盡さゞるべからざる所以なり。譬へば伊勢詣する者東京より伊勢まで、まづ百里として路用拾圓なれば、上下廿日として、一日五十錢に當る。是則ち天命なり。然るを一日に六十錢づゝ遣ふ時は、二圓の不足を生ず。之を四

十錢づゝ遣ふ時は貳圓の有餘を生ず。是人事を以て天命を伸縮すべき道理の譬也。是れ此世界は自轉運動の世界なれば決して一所に止らず。人事の勤怠に仍て天命も伸縮すべし。たとへば今朝焚べき薪なきは是れ天命なれども、明朝取來れば則ちあり。今水桶に水の無きも、則ち差當つて天命なり。されども汲み來れば則ちあり。百事此道理なり。

懶惰者と勉强人——一言を聞いても人の勤惰は分かる者なり。「東京は水さへ錢が出る」と云ふは懶惰者なり。「水を賣りても錢が取れる」といふは勉强人なり。夜は未だ九時なるに「十時だ」と云ふ者は、寢たがる奴なり。「未だ九時前なり」と云ふは、勉强心のある奴なり。すべての事、下に目を付け、下に比較する者は、必ず下り向きの懶惰者なり。たとへば碁を打ちて遊ぶは酒を飲むよりよろし。酒を呑むは博奕よりよろしと云ふが如し。上に目を付け上に比較する者は、必ず上り向きなり。古語に、「一言以て知とし、一言以て不知とす」とあり。うべなるかな。

過ぎたるは及ばず——凡そ物毎に度と云ふ事あり。飯を炊くも料理をするも、皆宜しき程こそ肝要なれ、我方法も又同じ。世話をやかねば行はれざるは勿論なれども、世話をやき過ぎると、又人に厭はれ、如何にして宜しきや分らず、先づ捨ておくべし、など〻云ふに至るものなり。古人の句

に、「さき過ぎきて是さへいやし梅の花」とあり。云ひ得て妙なり。百事過ぎたるは及ばざるにおとれり。心得べき事なり。

己が心に異見せよ——人に說くことを止めよ。人に說くことを止めて、おのれが心にて、己が心に異見せよ。己が心にて己が心に異見するは、柯を取つて柯を伐るよりも近し。元己が心なればなり。夫れ異見する心は汝が道心なり。異見せらるゝ心は汝が人心なり。寢ても覺めても坐しても歩ゝ事なき故、行住坐臥油斷なく異見すべし。若し己れ酒を好まば、多く飲む事を止めよと異見すべ行ても離るし。速かに止めばよし。止めざる時は幾度も異見せよ。其外驕奢の念起る時も、安逸の欲起る時も皆同じ。百事此の如くみづから戒めば、是無上の工夫なり。此工夫を積んで、己が身修り家齊ひなば、是れ己が心己が心の異見を聞きしなり。此時に至らば汝が說を聞く者あるべし。己れ修つて人に及ぶが故なり。己の心にて己が心を戒しめ、己聞かずば必ず人に說く事なかれ。

分度と推讓——富者にして足る事を知らず、飽くまで利を貪り、不足を唱ふるは、大人の湯船の中に立つて、屈まずして湯を肩に掛けて、「湯船はなはだ淺し。膝にだも滿たず」と罵るが如し。若し湯をして望みに任せば小人童子の如きは入浴する事能はず。是湯船の淺きにはあらずして、己が

屈まざるの過なり過を知りて屈まば、湯忽ち肩に滿ちておのづから十分ならん。何ぞ他に求むる事をせん。世間富者の不足を唱ふる、何ぞ是に異ならん。夫れ分度を守らざれば千萬石といへども不足なり。一度過分の誤を悟りて分度を守らば、有餘おのづから有つて人を救ふに餘あらん。夫れ湯船は大人は屈んで肩につき、小人は立つて肩につくを中庸とす。百石の者は五十石に屈んで五十石の有餘を讓り、千石の者は五百石に屈んで、五百石の有餘を讓る。是を中庸と云ふべし。若し一鄕の内一人此道を踏む者あらば、人々皆分を越ゆるの誤を悟らん。人々皆此誤を悟り、分度を守りて克く讓らば、一鄕富榮にして和順ならん事疑ひなし。古語に「一家仁なれば、一國仁に興る」と云へり。能く思ふべき事なり。夫れ仁は人道の極なり。儒者の說甚だむづかしくして用をなさず。近く譬れば、此湯船の湯の如し。是を手にて己が方へ掻はゞ、是我が方に來るが如くなれども、皆向ふへ流れ歸るなり。是を向ふへ押す時は、湯向ふの方へ行くが如くなれども、又我が方へ流れ歸へる。少く押せば少しく歸り、强く押せば强く歸る。是天理なり。是れ仁と云ひ義と云ふは、向へ押す時の名なり。我方へ掻く時は不仁となり、不義となる。愼まざるべけんや。古語に「己に克つて禮に復れば天下仁に歸す。仁をなす己による。人によらんや」とあり。己とは、手の我方へ向く時

の名なり。禮とは我手を先の方に向くる時の名なり。我方へ向けては、仁を說くも義を演ぶるも、皆無益なり。能く思ふべし。夫れ人體の組立を見よ。人の手は我方へ向きて、我が爲に辨利に出來たれども、又向ふの方へも向き、向ふへ押すべく出來たり。是人道の元なり。鳥獸の手は是に反して、只我方へ向きて我に辨利なるのみ。されど人たる者は他の爲に押すの道あり。然るを我が身の方に手を向け、我が爲に取る事のみを勤めて、先の方へ手を向けて他の爲に押す事を忘るゝは、人にして人にあらず。則ち禽獸なり。豈耻かしからざらんや。只耻かしきのみにあらず。天理に違ふが故に終に滅亡す。故に我常に「奪ふに益なく讓るに益あり。讓るに益あり奪ふに益なし。是則ち天理なり」と敎ふ。能々玩味すべし。

入るものは出たる物——夫れ入るは出たる物の歸るなり。來るは押讓したる物の入り來るなり。譬へば農人田畑の爲に盡力し、人糞を掛け干鰯を用ひ、作物の爲に力を盡せば、秋に至りて實法りを得る事、必ず多きは勿論なり。然るを菜を蒔いて、出るとは芽をつみ、枝が出れば枝を切り、穗を出せば穗をつみ、實なれば實を取る、此の如くなれば決して收穫なし。商法も又同じ。己が利欲のみを專として買人の爲を思はず。猥りに貪らば其店の衰微、眼前なるべし。

兩全の道――世の中に法則とすべき物は、天地の道と親子の道と夫婦の道と農業の道との四つなり。此道は誠に兩全完全の物なり。百事此四つを法とすれば誤なし。予が歌に「おのが子を惠む心を法とせば學ばずとても道に到らん」とよめるは此心なり。夫れ天は生々の德を下し地は之を受けて發生し、親は子を育して損益を忘れひたすら生長を樂み、子は育せられて父母を慕ふ。夫婦の間又相互に樂んで、子孫相續す。農夫勤勞して植物の繁榮を樂み、草木又欣々として繁茂す。皆相共に苦情なく、悅喜の情のみ。扨て此道に法とる時は、商法は賣つて悅び買つて悅ぶ樣にすべし。賣つて悅び買つて喜ばざるは道にあらず。買つて喜び賣つて悅ばざるも道にあらず。貸借の道も亦同じ。借りて喜び貸して喜ぶ樣にすべし。借りて喜び貸して悅ばざるは道にあらず。貸し悅び借りて喜ばざるは道にあらず。百事此の如し。夫れ我教は是を法とす。故に天地生々の心を心とし、親子と夫婦との情に基き損益を度外に置き、國民の潤助と土地の興復とを樂むなり、然らざれば能はざる業なり。夫れ無利息金貸付の道は、元金の增加するを德とするなり。是利を以て利とせず、義を以て利とするの意なり。元金の增加するを喜ぶは利心なり。貸附高の增加を喜ぶは善心なり。元金は終に百圓なりといへども、六十年繰返し〳〵貸す時は、其貸附高は一萬二千八百五十圓とな

る。而して元金は元の如く百圓にして增減なく、國家人民の爲に益ある事莫大なり。正に日輪の萬物を生育し萬歲を經れども一つの日輪なるが如し。古語に「敬する處の物少くして悅ぶ者多し。之を要道と云ふ」とあるに近し。我れ此法を立てし所以は、世上にて金銀を貸し催促を盡したる後、裁判を願ひ取れざる時に至つて、無利足年賦となすが通當なり。此理を未だ貸さゞる前に見て、此法を立てたるなり。されども未だ足らざる處あるが故に、無利足何年置據貸しと云ふ法をも立てたり。此の如く爲さゞれば國を興し世を潤ほすにたらざればなり。凡そ事は成り行くべき先を前に定むるにあり。人は生るれば必ず死すべき物なり。死すべき物と云ふ事を前に決定すれば、活きて居る丈け日々利益なり。是れ予が道の悟なり。生れ出ては死のある事を忘るゝ事なかれ。夜が明けなば暮るゝと云ふ事を忘るゝ事なかれ。

村里の興復――村里の興復は善人を擧げ出精人を賞譽するにあり。是を賞譽するは、投票を以て耕作出精にして、品行宜しく心掛宜しき者を撰み無利足金、旋回貸附法を行ふべし。此法は譬へば米を臼にて搗が如し。杵は只臼の正中を搗くのみにして、臼の中の米同一に白米となると同じ道理にて、返濟さへ滯らざれば、社中一同知らず〳〵自然と富實すべし。而して返濟の滯るは、譬へば

臼の米の返らざるが如し。是此仕法の大患なり。臼の米返らざる時は、村搗くとなりて折れ碎くる物なり。此仕法にて返濟滯る時は、仕法萎靡して振はざる物なり。貸附取扱ひの時、能々注意すべし。

天地の眞理と運——世人運といふ事に心得違ひあり。譬へば柿梨子などを籠より打明ける時は、自然と上になるあり、下になるあり。上を向くあり、下を向くあり。如此を運と思へり。運といふ物此の如き物ならば頼むにたらず。如何となれば、人事を盡してなるにあらずして、偶然となるなれば、再び入れ直して明ける時はみな前と違ふべし。是博突の類にして運とは異なり。夫れ運といふは、運轉の運にして所謂廻り合せといふ物なり。幾回旋轉するも、此定規に外れずして廻り合するを云ふなり。能く世の中にある事なり。挑燈の火の消えたるために禍を免れ、又履物の緒の切れたるが爲に、災害を逸るゝ等の事、これ偶然にあらず、眞の運なり。佛に云ふ處の因應の道理則ち是なり。儒道に積善の家餘慶あり、積不善の家餘殃あるは、天地間の定規、古今に貫きたる格言なれども、佛理によらざれば判然せざるなり。夫れ佛に三世の說あり。此理は三世を觀通せざれば、決して疑ひなき事あたはず。疑の甚しき、天を怨み人を恨むに至る。三世を觀通すれば、此疑ひな

し。雲霧晴れて晴天を見るが如く、皆自業自得なるをしる。故に佛敎三世の因緣を說く。是れ儒の及ばざる所なり。今癸に一本の草あり。現在若草なり。其過去を悟れば種なり。其未來を悟れば花咲き實法りなり。莖高く延びたるは肥多き因緣なり。莖の短きは肥のなき應報なり。其理三世をみる時は明白なり。而して世人此因緣果應報の理を佛說と云へり。是は書物上の論なり。是を我流儀の不書の經に見る時は、釋氏未だ此世に生れざる昔より行はれし天地間の眞理なり。不書の經とは予が歌に「聲もなく香もなく常に天地に書かざる經を繰返しつゝ」と云へる四時行はれ百物成る處の眞理を云ふ。此經を見るには肉眼を閉ぢ、心眼を開きて見るべし。然らざれば見えず。肉眼にて見えざるにはあらねども、徹底せざるを云ふなり。夫れ因報の理は、米を蒔けば米が生へ、瓜の蔓に茄子のならざるの理なり。此理天地開闢より行はれて、今日に至つて違はず。皇國のみ然るにあらず。萬國皆然り。されば天地の眞理なる事、辯を待たずして明なり。

無盡藏福聚海——遠を謀る者は富み、近きを謀る者は貧す。夫れ遠きを謀る者は、百年の爲に松杉の苗を植う、まして春植ゑて秋實のる物に於てをや。故に富有なり。近きを謀る者は春植ゑて秋實法る物をも猶遠しとして植ゑず、只眼前の利に迷ふて蒔ずして取り、植ずゑして刈取る事のみに

眼をつく、故に貧窮す。夫れ蒔ずして取り植ゑずして刈る物は、眼前利あるが如しといへども、一度取る時は二度刈る事を得ず。蒔いて取り、植ゑて刈る者は歳々盡くる事なし。故に無盡藏と云ふなり。佛に福聚海といふも又同じ。

大道は水の如し——大道は譬へば水の如し。善く世の中を潤澤して滯らざる物なり。然る尊き大道も書に筆して書物と爲す時は、世の中を潤澤する事なく。世の中の用に立つ事なし。譬へば水の氷りたるが如し。元水には相違なしといへども、少しも潤澤せず、水の用はなさぬなり。而して書物の注釋と云ふ物は又氷に氷柱の下りたるが如く、永の解けて又氷柱となりしに同じ。世の中を潤澤せず、水の用を爲さぬはやはり同樣なり。扨てこの水となりたる經書を世上の用に立んには、胸中の溫氣を以て能く解かして、もとの水として用ひされば、世の潤澤にはならず。實に無益の物なり。氷を解かすべき溫氣胸中になくして、氷の儘にて用ひて水の用をなす物と思ふは愚の至なり。世の中神儒佛の學者有りて世の中の用に立たぬは是が爲なり。能く思ふべし。故に我が敎は實行を尊む。夫れ經文と云ひ經書と云ふ。其經と云ふは元機の立糸の事なり。されば竪糸ばかりにては用をならず。横に日々實行を織込んで初めて用をなす物なり。横に實行を織らず只竪糸のみには益な

き事、緯を待たずして明かなり。

止る所を知れ——富貴を求めて止まる事を知らざるは凡俗の通病なり。是を以て永く富貴を保つ事能はず。夫れ止まる處とは何ぞや。曰く日本は日本の人の止まる處なり。然らば此國は此國の人の止まる處、其村は其村の人の止まる處なり。されば千石の村も五百石の村も又同じ。海邊の村、山谷の村皆然り。千石の村にして家百戸あれば、一戸十石に當る。是天命、正に止まるべき處なり。然るを先祖の餘蔭により百石、二百石持居るは有難き事ならずや。然るに止まる處を知らず際限なく田畑を買ひ集めん事を願ふは尤も淺間し。譬へば山の頂に登りて猶登らんと欲するが如し。已れ絶頂に在りて猶下を見ずして、上のみを見るは、危し。夫れ絶頂に在りて下を見る時は、皆な眼下なり。眼下の者は憐むべく惠むべき道理自からあり。然る天命を有する富者にして、猶己を利せん事のみを欲せば、下の者如何ぞ貧ぼらざる事を得んや。若し上下互ひに利を爭はゞ、奪はざれば飽かざるに到らん事必せり。是禍の起るべき元因なり恐るべし。且つ海濱に生れて山林を羨み、山家に住して、漁業を羨む尤も愚なり。海には海の利あり山には山の利あり。天命に安じて其外を願ふ事勿れ。

貧富驕儉――世人、口には貧富驕儉を唱ふるといへども、何を貧と云ひ、何を富と云ふ。何を驕と云ひ、何を儉と云ふ。理詳かにせず。天下固より大も限なし小も限なし。十石を貧と云へば無祿の者あり。十石を富といへば百石のものあり。百石を貧といへば五十石の者あり。百石を富といへば千石萬石あり。千石を大と思へば世人小旗本といふ。萬石を大と思へば世人小大名といふ。然らば何を認めて貧富大小を論ぜん。譬へば寶買の如し。物と價とを較べてこそ、下直高直を論ずべけれ、物のみにして高下を言ふべからず。價のみにて又高下を論ずべからざるが如し。是世人の惑ふ處なれば今是を詳かに云ふべし。曰く千石の村戸數一百、一戸十石に當る。是自然の數なり。是を貧にあらず富にあらず。大にあらず小にあらず。不偏不倚の中と云ふべし。此中に足らざるを貧と云ふ。此中を越ゆるを富と云ふ。此十石の家九石にて經營むを儉と云ふ。十一石にて暮すを是を驕奢と云ふ。故に予常に曰く、中は增減の源、大小兩名の生ずる處なりと。されば貧富は一村〳〵の石高平均度を以て定め、驕儉は一己〳〵の分限を以て論ずべし。其分限に依ては朝夕膏粱に飽き錦繡を纏ふも、玉堂に起臥するも奢にあらず。分限に依ては米飯も奢なり、茶も煙草も奢なり。謾に驕儉を論ずる事勿れ。

推讓の道――夫れ讓は人道なり。今日の物を明日に讓り、今年の物を來年に讓るの道を勤めざるは、人にして、人にあらず。十錢取つて十錢遣ひ、廿錢取つて廿錢遣ひ、宵越しの錢を持たぬと云ふは、鳥獸の道にして人道にあらず。夫れ人には今年の物を來年に讓り、其上子孫に讓り他に讓るの道あり。雇人と成つて給金を取り、其半を遣ひ其半を向來の爲に讓り、或は田畑を買ひ、家を立て、藏を立てるは、子孫へ讓るなり。是世間知らず〳〵人々行ふ處、則ち讓道なり。されば、一石の者五斗讓るも出來難き事にはあらざるべし。如何となれば我が爲の讓なればなり。此讓は敎なくして出來安し。是より上の讓は敎に依らざれば出來難し。是より上の讓とは何ぞ。親戚朋友の爲に讓るなり。鄕里の爲に讓るなり。猶出來難きは國家の爲に讓るなり。此讓も到底、我が富貴を維持せんが爲なれども眼前他に讓るが故に難きなり。家產ある者に、勤めて家法を定めて推讓を行ふべし。或問ふ夫れ讓は富者の道なり。千石の村戸數百戸あり。一戸十石あり。是貧にあらず富にあらざるの家なれば、讓らざるも其分なり。十一石となれば富者の分に入るが故に、十石五斗を分度と定め五斗を讓り、二十石の者は同じく、五石を讓り、三十石の者は十石を讓る事と定めば如何。曰く可なり。されど讓りの道は人道なり。人と生るゝ者、讓りの道なくては有るべからざるは論を待

たずといへども、人に寄り家に寄り、老幼多きあり病人あるあり、厄介あるあれば、毎戸法を立て嚴に行へと云ふといへども、行はるゝ者にあらず。只富有者に能く敎へ、有志者に能く勸めて行はしむべし。而して此道を勤むる者は、富貴榮譽之れを去る。少く行へば少く歸し大に行へば大に歸す。予が言ふ處必ず違はじ。世の富有者に能く敎へ度きは此讓道なり。獨り富者のみにあらず。又金穀のみにあらず。道も讓らずばあるべからず。畔も讓らずばあるべからず。言も讓らずばあるべからず。功も讓らずばあるべからず。一三子能く勤めよ。

富貴天にあり——奚に物あり。寶らんと思ふ時は、餝らざるを得ず。譬へば芋大根の如きも寶らんと欲すれば、根を洗ひ枯葉を去り、田圃にある時とは、其の樣を異にす。是れ寶らんと欲する故なり。我道を學ぶとも此道を以て、世に用ひられ、立身せんと思ふ事なかれ。世に用ひられん事を願ひ、立身出世を願ふ時は、本意に違ひ本體を失ふに至り、夫が爲に愆つ者あり。只能く此道を學び得て、自ら能く勤むれば、富貴は天より來るなり。決して他に求むる事勿れ。偖古語に「富貴天にあり」と云へるを誤解して、寢て居ても富貴が天より來たる物と思ふ者あり。大なる心得違ひなり。富貴天に有りとは、己が所行天理に叶ふ時は、求めずして富貴の來たるを云ふなり。誤解する

事勿れ。天理に叶ふとは一刻も油斷なく、天道の循環するが如く、日月の運動するが如く、勤めて息まざるを云ふなり。

一家の維持——家屋の事を俗に、家船又家臺船と云ふ。面白き俗言なり。家をば實に船と心得べし。是を船とする時は主人は船頭なり。一家の者は皆乘合ひなり。世の中は大海なり。然る時は家に事あるも、又世の大海に事あるも、皆遁れざる事にして船頭は勿論、此船に乘り合ひたる者は、一心協力此屋船を維持すべし。扨て此屋船を維持するは、楫の取樣と船に穴のあかぬ樣にするとの二つが專務なり。此二つによく氣をつければ、家船の維持疑ひなし。然るに楫の取樣にも心を用ひず、家船の底に穴があきても、是を塞がんともせず、主人は働かずして酒を呑み、妻は遊藝を樂しみ、悴は碁將棋に耽り、二男は詩を作り、歌を讀み、安閑として歲月を送り、終に家船をして沈沒するに至らしむ。歎息の至ならずや。縱令大穴ならずとも、少しにても穴があきたらば、速に乘合一同力を盡して穴を塞ぎ、朝夕ともに穴のあかざる樣に能々心を用ゆべし。是此乘合の者の肝要の事なり。然るに既に大穴明きて猶、是を塞がんともせず、各々己が心の儘に安閑と暮らし居て、「誰か塞いて呉れさふな物だ」と待つて居て濟むべきや。助け船をのみ賴みにして居て濟むべきや。船

中の乘合ひ一同、身命を抛ちて働かずばあるべからざる時なるをや。

報恩の勤——夫れ孝は親の恩に報うの勤めなり。弟は兄の恩に報うの勤なり。凡そ世の中は恩の報はずばあるべからざるの道理を能く辨知すれば、百事心の儘なる者なり。恩に報うとは、借りたる物には、利を添へて返へして禮をいひ、世話に成つた人には能く謝儀をし、買ひ物の代をば速に拂ひ、日雇賃をば日々拂ひ、總て恩を受けたる事を能く考へて能く報う時は、世界の物は實に我物の如く何事も欲する通り、思ふ通りになる。奚に到りて神明に通じ四海に光り、西より東より南より北より思ふとして服せざる事なしとなるなり。然るにある歌に「三度たく飯さへこはしやはらかし思ふまゝにはならぬ世の中」と云へり。甚だ違へり。是れ勤むる事を知らず働く事をせず、人の飯を貰ふて食ふ者などの詠めるなるべし。夫れ此世の中は前に云へるが如く、恩に報う事を厚く心得れば、何事も思ふまゝなる物なり。然るを思ふ儘にならぬと云ふは、代を拂はずして品を求め、蒔かずして、米を取らんと欲すればなり。此歌句を「おのがたく」と直して、我身の事にせば可ならんか。

利を爭へば國滅ぶ——國家の盛衰存亡は、各々利を爭ふの甚しきにあり。富者は足る事をしらず

世を救ふ心なく、有るが上にも願ひ求めて、己が勝手のみを工夫し、天恩も知らず國恩も思はず、貧者は又何をかして己を利せんと思へども、工夫あらざれば、村費の納む可きを滯り、作德の出すべきを出さず、借りたる物を返へさず、貧富共に義を忘れ、願ひても祈りても、出來難き工夫のみをして、利を爭ひ、其見込の外れたる時は身代限りと云ふ大河のうき瀨に沈むなり。此大河も覺悟して入る時は、溺れ死するまでの事はなき故、又浮み出る事も、向ふ岸へ泳ぎ付く事もあるなれども、覺悟なくして此川に陷る者は、再び浮み出る事出來ず、身を終るなり。愍れむ可し。我教は世上かゝる惡弊を除きて、安樂の地を得せしむるを勤とす。

勤勞は自然の道——世の中、用をなす材木は皆四角なり。然りといへ共、天、人の爲に四角なる木を生ぜず。故に滿天下の山林に四角なる木なし。又皮もなく骨もなく、蒲鉾の如く半片の如き魚あらば、人の爲便利なるべけれど、天是を生ぜず。故に滿々たる大海に斯の如き魚一尾もあらざるなり。又糠もなく糠もなく、白米の如き米あらば、人世此上もなき益なれ共、天是を生ぜず。故に全國の田地に一粒も此米なし。是を以て天道と人道と異る道理を悟るべし。又南瓜を植ゑれば、必ず蔓あり、米を作れば、必ず藁あり。是又自然の理なり。夫れ糠と米は一身同體なり。肉と骨も

又同じ。肉多き魚は骨も大なり。然るを縑と骨とを嫌ひ、米と肉とを欲するは、人の私心なれば、天に對しては申譯(もうしわけ)なかるべし。然りといへども、今まで喰ひたる飯(めし)も餒(す)へれば、喰ふ事の出來ぬ人間なれば仕方なし。能々此理を辨明せざれば、我道は了解する事難く行ふ事難し。

青天白日事——貧となり富となる。偶然にあらず。富も因つて來る所あり。人皆貨財(くわざい)は富者の處に集ると思へども然らず。節儉なる處と勉强する處に集るなり。百圓の身代の者、百圓にて暮らす時は富の來る事なく、貧の來る事なし。百圓の身代を八十圓にて暮らし、七十圓にて暮らす時は、富是に歸し財是に集る。百圓の身代を百廿圓にて暮らし、百三十圓にて暮らす時は貧是に來たり財是を去る。只分外に進むと分内に退くとの違ひのみ。或歌に「有といへば有とや人の思ふらむ呼べば答ふる山彦(やまびこ)の聲」と云へるが如く、世人今有れども、其有る原因を知らず。「無といへば無しとや人の思ふらんよべば答ふる山彦の聲」にて、世人今なきも其の無きもとを知らず。夫れ今有る物は、今に無くなり、今無きものは今にあり。譬へば今有りし錢のなくなりしは物を買へばなり。今無き錢の今あるは勤むればなり。繩一房なへば五厘手に入り、一日働けば十錢手に入るなり。今手に入る十錢も酒を呑めば直(たゞ)ちになし。明白疑ひなき世の中なり。中庸に曰く

「誠なれば則ち明かなり。明かなれば則ち誠なり」と。繩一房なへば五厘となり。五厘遣れば繩一房來る。晴天白日の世の中なり。

報德の道——我が教は德を以て德に報ゆるの道なり。天地の德より、君の德、親の德、祖先の德其蒙る處人々皆廣大なり。之に報うに我德行を以てするを云ふ。君恩には忠、親恩には孝の類、之を德行と云ふ。扨此德行を立てんとするには、先づ己れ〳〵が天祿の分を明かにして、之を守るを先とす。故に予は入門の初めに分限を取調べて、能く辨へさすなり、如何となれば、大凡富家の子孫は、我家の財產は何程ありや、知らぬ者多ければなり。予が人を教ふる、先づ分限を明細に調べ「汝が家株田畑何町何反歩、此作益何圓、内借金の利子、何程を引き、殘金何程なり。是汝が暮らすべき一年の天祿なり。此外に取る處なく、入る處なし、此内にて勤儉を盡して暮しを立て、何程か餘財を讓る事を勤むべし。是道なり。是汝が天命にして、汝が天祿なり」と、皆此の如く教ふるなり。是又心盲の者を助くるの道なり。夫れ入るを計りて天分を定め、音信贈答も義理も禮儀も、皆此内にて爲すべし。出來ざれば、皆止むべし。或は之を吝嗇(りん)と云ふ者ありとも、夫は云ふ方の誤りなれば、意とする事勿れ。何となれば、此外に取る處なく、入る物なければなり。されば義理も

交際も出來されば爲さゞるが、則ち禮なり義なり道なり。此理を能々辨へて惑ふ事勿れ。是れ德行を立つる初めなり。己が分度立たざれば、德行は立たざる物と知るべし。

政道の本意——惰風極まり、汚俗深染の村里を新にするは、いとも難き業なり。如何となれば、法戒むべからず、令行はる可からず、教施す可からず、之をして精勵に赴かしめ、之をして義に向はしむる、豈難からずや。予昔櫻町陣屋に來る。配下の村々至惰至汚、如何ともすべき樣なし。之れに依て予深夜、或は未明、村里を巡行す。惰を戒むるにあらず、朝寢を戒むるにあらず。可否を問はず、勤惰を言はず。只自の勤として、寒暑風雨といへども怠らず。一二月にして初て足音を聞きて驚く者あり、又足跡を見て怪む者あり。又現に逢ふ者あり。是より相共に戒心を生じ、畏心を抱き、數月にして、夜遊博突鬪爭等の如きは、勿論夫妻の間、奴僕の交、叱咤の聲無きに至れり。諺に「權平種を蒔けば烏之を掘る。三度に一度ほ追はずばなるまい」と云へり。是鄙俚戲言といへ共、有職の人知らずば有る可からず。夫烏の田圃を荒らすは、烏の罪にあらず。田圃を守る者追はざるの過なり。政道を犯す者有るも、官之を追はざるの過なり。之を追ふの道も又權兵衛が追ふを以て勤として、捕ふるを以て本意とせざる如く、あり度物なり。此戲言の本意に適へり。鄙俚の言

といへども心得ずば有るべからず。

至誠と實行——我が道は至誠と實行のみ。故に、鳥獸蟲魚草木にも皆及ぼすべし。況や人に於けるをや。故に才智辯舌を尊まず。才智辯舌は、人には說くべしといへども、鳥獸草木を說く可からず。鳥獸は心あり。或は欺くべしといへども、草木をば欺く可からず。夫れ我道は至誠と實行となるが故に、米麥蔬菜瓜茄子にても、蘭菊にても皆是を繁榮せしむるなり。假令知謀孔明を欺き、辯舌蘇張を欺くといへども、辯舌を振つて草木を榮えしむる事は出來ざるべし。故に才智辯舌を尊まず、至誠と實行を尊ぶなり。古語に「至誠神の如し」と云ふといへども、至誠は則ち神と云ふも、不可なかるべきなり。凡そ世の中は智あるも學あるも、至誠と實行とにあらざれば、一事は成らぬ物と知るべし。

實地實行——朝夕に善を思ふといへども、善事を爲さゞれば善人と云ふべからざるは、晝夜惡を思ふといへども、惡を爲さゞれば惡人と云ふべからざるが如し。故に人は悟道治心の修行などに暇を費さんよりは、小善事なりとも身に行ふを尊しとす。善心發らば速に是を事業に表すべし。親ある者は親を敬養すべし。子弟ある者は子弟を敎育すべし。飢人見て哀れと思はゞ速に食を與ふべ

し。「悪しき事をしたり、われ過てり」と心付くとも改めざれば詮なし。仇人を見て哀れと思ふとも食を與へざれば功なし。故に我道は實地實行を尊ぶ。夫れ世の中の事は實行にあらざれば、事は成らざる物なればなり。譬へば菜蟲の小なる、是を求むるに得べからず。然れども菜を作れば、求めずして自ら生ず。子子の小なる、是を求むるに得べからず。桶に水を溜めおけば自ら生ず。今此席に蠅を集めんとすとも、決して集らず。捕へ來りて放つとも、皆飛びさる。然るに飯粒を置く時は集めずして集まるなり。能々此道理を辨へて實地實行を勵むべし。

道德の本源——世の中双物を取り遣りするに、刃の方を我が方へ向け、柄の方を先の方に出すは是道德の本意なり。此意を能く押し弘めば、道德は全かるべし。人々此の如くならば、天下平かなるべし。夫れ双先を我方にして、先方に向けざるは其心、萬一誤ある時、我身には疵を付けるとも、他に疵を付けざらんとの心なり。萬事此の如く心得て、我身上をば損す共、他の身上には損は掛けじ、我が名譽は損する共、他の名譽には疵を付けじと云ふ精神なれば道德の本體全しと云ふべし。是より先きは此心を押し擴むるのみ。

身代の維持——人の身代は大凡數ある物なり。譬へば鉢植の松の如し。鉢の大小に依つて、松に

も大小あり。綠を延ばし次第にする時は、忽ち枯氣付く物なり。年々に綠をつみ、枝をすかしてこそ美しく榮ゆるなれ。是れ心得可き事なり。此理をしらず、春は遊山に綠を延ばし、秋は月見に綠を延ばし、斯の如く據なき交際と云ふては枝を出し、親類の付合と云ふては梢を出し、分外に延び過ぎ枝葉次第に殖へゆくを伐捨てざる時は、身代の松の根、漸々に衰へて枯れ果つべし。されば其鉢に應じたる枝葉し殘し、不相應の枝葉をば年々に伐りすかすべし、尤も肝要の事なり。

奇々妙々の世の中——杣が深山に入りて木を伐るは、材木が好きにて伐るにはあらず。炭燒が炭を燒くも、炭が好きにて燒くにはあらず。夫れ杣も炭やきも、其職業さへ勉强すれば、白米も自然に山に登り、海の魚も、里の野菜も、酒も油も、皆自ら山に登るなり。奇々妙々の世の中といふべきなり。

只有明の月ぞ殘れる——「郭公鳴つる方をながむればたゞ有明の月ぞ殘れる」此歌の心は、譬へば鎌倉の繁花なりしも、今は只跡のみ殘りて物淋しき在樣なりと、感激の心をよめるなり。只鎌倉のみにあらず。人々の家も又然り。今日は家藏建て並べて人多く住み賑はしきも、一朝行き遠へば、身代限りとなり屋敷のみ殘るに至る。恐れざるべけんや。慎まざるべけんや。惣て人造物は事ある

時は皆亡びて、殘るは天造物のみぞと云ふ心を含みて詠めるなり。能く其深意を知るべし。

盛衰の運——山谷は寒氣に閉ぢて雪降り凍れ共、柳の一芽開き初むる時は山々の雪も、谷々の氷も皆失れ迄なり、又秋に至り、桐の一葉落ち初むる時は天下の青葉は又失れ迄なり。夫れ世界は自轉して止まず、故に時に逢ふ者は育ち、時に逢はざる物は枯るゝなり。午前に東向の家は照れ共、西向の家は蔭り、午後は西に向く物は日を受け、東に向く物は蔭るなり。此理を知らざる者、惑ふて我不運なりといひ、世は末なりなどゝ歎くは誤なり。今奚に幾萬金の負債あり共、何萬町の荒蕪地あり共、賢者有りて此道に寄る時は憂ふるに足らず。豈喜ばしからずや。縱令何百萬金の貯蓄あり、何萬町の領地あり共、暴君ありて道を踏まず、是も不足、彼も不足と驕奢慢心、增長に增長せば消滅せん事、秋葉の嵐に散亂するが如し。恐れざるべけんや。予が歌に

「奥山は冬氣に閉ぢて雪ふれどほころびにけり前の川柳」

天上天下唯我獨尊——天上天下唯我獨尊と云ふ事を、俠客者流など、廣言を吐いて、天下廣しといへ共、我に如く者なしなどゝ云ふと同じく、釋氏の自慢と思ふ者あり。是誤なり。是は釋氏のみならず。世界皆、我れも人も、唯此の我れこそ、天上にも天下にも尊き者なれば、我に勝りて尊き

物は、必ず無きぞといふ教訓の言葉なり。然らば則ち銘々各々、此の我身が天地間に上無き尊き物ぞ。如何となれば、天地間我なければ、物無きが如くなればなり、されば銘々各々皆、天上天下唯我獨尊なり。犬も獨尊なり鷹も獨尊なり、猫も杓子も獨尊と云ふて可なる物なり。

交際の道——交際は人道の必要なれど世人交際の道を知らず。交際の道は碁將棋の道に法るを善とす。夫れ將棋の道は强き者駒を落して、先の人の力と相應する程にしてさすなり。甚しき違ひに至りては、腹金とか又歩三兵と云ふまで外すなり。是れ交際上必用の理なり。己れ富み且つ才藝あり學問ありて、先の人貧ならば、富を外すべし。先の人不才ならば、才を外すべし。無藝ならば、藝を外すべし。不學ならば學を外すべし。是れ將棋をさすの法なり。此の如くせざれば、交際は出來ぬなり。己れ貧にして不才、且つ無藝ならば碁を打つが如く心得べし。先の人富みて才あり、且つ學あり藝あらば、幾目も置きて交際すべし。是れ碁の道なり。此れ獨り碁將棋の道にあらず。人と人と相對する時の道も、此理に隨ふべし。

惡習を善に導く——深く惡習に染みし者を善に移らしむるは甚だ難し。或は惠み、或は諭す。一旦改むる事ありといへども、又元の惡習に歸るものなり。是く如何ともすべなし。幾度も是を惠み

教ふべし。惡習の者を善に導くは、譬へば澁柿の臺木に甘柿を接穗にしたるが如し。やゝともすれば臺芽の持前發生して、穗の善を害す。故に穗をせし者、心を付けて臺芽を掻き取るが如く、厚く心を用ふべきなり。若し怠れば臺芽の爲に穗の方は枯れ失せべし。

救窮の法——世間救窮に志ある者、猥りに金穀を施與するは、甚だ宜しからず。何となれば、人民を怠惰に導くが故なり。是れ惠んで費ゆるなり。惠んで費えざる樣に注意して、施行し人民をして奮發勉强に赴かしむる樣にするを要するなり。

報恩の心——世人の常情、明日食ふべき物なき時は、他に借りに行かんとか、救ひを乞はんとかする心はあれども、彌ゝ明日は食ふべき物なしと云ふ時は、釜も膳椀も洗ふ心なしと云へり。人情實に然るべく尤の事なれども、此心は困窮其身を離れざるの根元なり。如何となれば、日々釜を洗ひ膳椀を洗ふは、明日食はんが爲にして昨日迄用ひし恩の爲に洗ふにあらず。是れ心得違ひなり。たとひ明日食ふべき物なしとも、釜も洗ひ膳も椀も洗ひ上げて餓死べし。是れ今日迄用ひ來りて、命を繋ぎたる恩あればなり。是れ恩を思ふの道なり。此心ある者は天意に叶ふ故に、長く富を離れざるべし。富と貧とは、遠き隔あるにあらず。明日助らむ事のみを思ひて、今日までの恩を思はざ

ると、明日助らむ事を思ふては、昨日までの恩を忘れざるとの二つのみ。是れ大切の道理なり。

驕奢を戒む——何程の富貴なりとも、家法をば節儉に立て、驕奢に馴るゝ事を嚴に禁ずべし。夫れ奢侈は不德の源にして、滅亡の基なり。如何となれば、奢侈は欲するよりして、利を貪る念を增長し、慈善の心薄らぎ、自然欲深く成りて吝嗇に陷り、夫より知らず〳〵職業も不正になり行きて災を生ずる物なり。恐るべし。論語に「周公の才の美ありとも奢且つ吝なれば、其餘は見るに足らず」とあり。家法は節儉に立て、我身能く之を守り、驕奢に馴るゝ事なく、飯と汁木綿着物は身を助くの眞理を忘るゝ事勿れ。何事も習ひ性となり。馴れて常となりては、仕方無き物なり。遊樂に馴るれば、面白き事もなくなり、甘き物に馴るれば、甘き物もなくなるなり。是れ自ら我が歡樂をも減ずるなり。日々勤勞する者は朔望の休日も樂みなり。盆正月は大なる樂みなり。是れ平日、勤勞に馴るゝが故なり。此理を明辨して滅亡の基を斷ち去るべし。且つ若き者は、酒を呑むも、烟草を吸ふも、月に四五度に限りて、酒好きとなる事勿れ、烟草好きとなる事勿れ、馴れて好きとなり、癖となりては生涯の損大なり。愼むべし。

聖人は大欲小人は小欲——世人皆、聖人は無欲と思へども然らず。其實は大欲にして、其大は正

大なり。賢人之に次ぎ、君子之に次ぐ。凡夫の如きは、小欲の尤小なる物なり。夫れ學問は此小欲を正大に導くの術を云ふ。大欲とは何ぞ。萬民の衣食住を充足せしめ、人身に大福を集めん事を欲するなり。其方、國を開き物を開き、國家を經綸し、衆庶を濟救するにあり。故に聖人の道を推し窮むる時は、國家を經綸して、社會の幸福を增進するにあり。大學中庸等に其意明かに見ゆ。其欲する處豈正大ならずや。能くおもふべし。

村里衰廢を擧ぐる法——村里の衰廢を擧ぐるには、財を拋(なげう)たざれば人進まず。財を拋つに道あり。受くる者其恩に感ぜざれば益なし。夫れ天下の廣き、善人少からず。然りといへども、汚俗を洗ひ、廢邑を起すに足らざるは皆其道を得ざるが故なり。凡そ里長たる者、其事に幹たる者は、必ず其邑の富者なり。縱令善人にして能く施すとも、自ら驕奢に居るゆへに、受くる者、其を恩と恩せず。只其奢侈を羨んで、自(み)の驕奢を止めず、分限を忘るゝの過を改めず、故に益なきなり。是に依て村長たらん者自謙して驕らず、約にして奢らず、愼んで分限を守り、餘財を推讓りて、村害を除き、村益を起し、窮を補ふ時は、其誠意に感じ、驕奢を欲するの念も富貴を羨むの念も、救ひ用捨を欲するの念も、皆散じて、勤勞を厭はず、麁衣麁食を厭はず、分限を越すの過を恥ぢ、分限の

內にするを樂(たのしみ)とす。此の如くならざれば、廢邑を興し、汚俗を一洗するに足らざるなり。

先生病床の遺言——予が死近きにあるべし。予を葬るに分を越ゆる事勿れ。墓石を立つる事勿れ。只土を盛り上げて、其傍に松か杉を一本植ゑ置けば夫(それ)にてよろし。必ず予が言に違(たが)ふ事勿れ。

至道は一也——天地は一物なれば、日も月も一つなり。されば至道二つあらず。至理は萬國同じかるべし。只理の窮めざると盡くさゞるあるのみ。然るに諸道各々道を異にして相爭ふは各區域を狹くし垣根を結回はして、相隔つるが故なり。共に三界城內に立籠りし、迷者と云ふて可なり。此垣根を見破りて後に道を談ずべし。此垣根の內に、籠れる論は聞いて益なし。說くも益なし。

昭和十一年五月二十日　印刷　二宮尊德先生の教訓
昭和十一年五月二十二日　發行　【定價金貳拾錢】

東京市荏原區中延町三九七
編輯者　和田玄之

東京市中野區宮園通一ノ二四
發行者　加藤顯一

東京市外武藏野町境六二八
印刷者　關東中學校作業科

不許
複製

發行所　東京市中野區宮園通一ノ二四
信の日本社
電話（中野）三二二二・七番
振替口座東京六一二〇八番

終

呈郷閣青少年諸君

東京市世田谷區下馬二丁目一、〇七一

出井俊一